
トリップしたら幼児化＆翼が生えた！

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップしたら幼児化＆翼が生えた！

【Zコード】

Z8431P

【作者名】

ティシー

【あらすじ】

中一病から抜け出せない女子高生がある日突然異世界へ。
トリップのオプションは白い翼と幼児化！

超美形の双子の王子と、同じ血が通っているとは思えぬ野獣顔の弟王子を巻き込み、巻き込まれて、それでも好き放題生きていく。

人気投票を設置しましたので是非是非ご協力ください！ ゴールを決めずに好き勝手やっていくので人気によって物語も変わっていく

くと細われます。

トリップ来たコレ！

ありり？
……ここは何処いすこ？

私は……ニコニコ動画にハマつて中一病にかかつたまま未だ抜け出せない華の女子高生。
おk。それは知ってる。

で、最大の疑問。

視界に入る真っ白な羽っぽいパタパタは、

なに？ 結構デカい。自分の体を覆い隠せるくらい。

首を右へギギギと動かしてみる。

……くそつ、もう少し柔軟体操しとくんだった。体の硬い私だから根元は見れなかつたけど、なんか私の背に繋がつてるようなん？ 地面がいつもより近い？

とりあえず左にもグググと動かしてみる。

あ痛ッ！

寝違えてたんだつた！

「おおう……」

首を押されて一人悶えていると、足元に影が出来た。

「何者だ」

あ、中タイイ声。グイッと見上げると……顔は厳つかつた。ついでに持つてる物も厳つかつた。
抜いていないものの、大男の右手は腰の物騒なものに添えられていた。

「ちよちよちよ落ち着こい？ か弱い乙女にいきなりそれはないよ！？ 大体人に名前聞く時はまず自分からって教わらなかつたかコニーヤロー！」

最後の方は何故か涙目になつて喧嘩腰だ。名前聞かれてもないけどー！
だつて、だつてつーさつき思い出したけど、本当は今から

「お氣に入りの二口生見る予定だつたんだーーー！」

あ、めつちや引かれてる。多分二口生の意味は理解出来てないだろうけど突然叫びだした女に引いた事は分かる。
しかしその人は強かつた。強靭な精神を持っているようだった。

「……俺はジユノア。おまえは？」
「はーい！ よく聞いてくれました！ 音乃ちゃんでっす しくよ
るー！」

あ、やばい。なんか名前聞いてくれたことが嬉しくて調子乗つた

「うーん引かれたつぽい。

てか名前がカタカナ！田が藍色ーやはぱつこはせ 異世界？
夢にまで見た 異世界？

「ヒヤッホウー！」

しまつた嬉し過ぎて心の声が出てきちゃったよ。テヘ
あ、ジユノちゃん（命名）の顔が引き攣りてる。そんなに引かな
いで？ちょっと変わってるだけだヨ？血覚は一応あるヨ？

そこでふと周りをグルリと見渡す。

「なんだか高級感溢れてる庭ですね」

まともな言葉が出たことに安心したのか、ジユノちゃんの顔は無
表情に戻った。

「……どこのから来た？」

おつと私の言葉はスルーかい？いいよ別に。そんなことじや拗ね
ないもんつ。

「えー教えて欲しいって言うんならー？ 教えてあげてもいい
下さいません調子乗りました日本からトリップしたつぽいです」

右手で髪をクルクルさせながらギャルっぽく言つてみたけど絶対
零度の視線に気付いたので戻した。

なんだか翼もショゲた氣がした。射殺されるかと思つたお。

「二ホン？」

「イエス！ ジャパニーズ！ 知りません？」

「…聞いたことがないな」

来た「フレートリップ万歳！」

「やつたー！ ジャジュノちゃんお世話になつたね！」

私の世界で自由に生きてくれ……

「ジュノちゃんはやめる。そして待て。家は分かってることのか？」

「ん~？ これから見つける！」

「おまえのようなガキが一人でか？」

「ガキ！？ いや確かにまだ18歳だけビガキって言われるほどガキじゃないよ！」

「……18？」

「そーだよ！」

えつへんつ、といった感じに腰に手をついて立王立ちしてみた。翼がバサアって広がった気がしたけど気にしない。

「……そうだな。だが今日はもう田が暮れる。家へ来い」

ええええー！ナンパ！？異世界来て早速ナンパ！？んもうつ、音乃ちゃんつたら罪なオ・ン・ナ！

……じゃなく。ジュノちゃんからはそんな雰囲気は全く出でていなくて、聞き分けの悪い子ども相手に困つてゐるような感じだった。え、それ私？もしかしなくともその相手私？……うん、お腹すいた。

「お邪魔しますつ！」

腹が減つては軍は出来ぬ^{二ノハナ}といひと申話になること^{一ノハナ}。

そこで衝撃を受けた。

「な、なんじや いつやああー………」

家が豪邸だつたからじやない。

メイドが何人もいたからじやない。

ジユノちゃんがなんか偉い人だつて知つたからじやない。

「誰」「レ……? いや私だけ……」

そう。鏡に映つた自分を見て絶句。

ど一見ても写真で見た数年前の自分と被る。翼^{ヒゲ}が生えてるつてい
う違^{ハラフ}いはあるけど。そういうば声もちょっと高い。

「よ、幼児化?」

「どうした! 何かあったのか!?

「これもトロッピの洗礼か!?

ジユノちゃんの声がして、扉が開く。

「ジユノア様、女性の部屋を突然開けては…」

着替えさせてくれていたメイドが震える声で囁いた。
だがそんなことを気にしている余裕はない。

「ジユジユジユジユジユノちゃん…」

「落ち着け。どうした?」

「わた、わたし小さくなつてゐる…」

「は?」

「翼も自分のだし…」

厳つい顔をしかめ、わけが分からないとこつ顔をするジユノちゃんとメイドさん達。

「だからっー！」

言いかけてやめる。待てよーーのまま幼い設定でこじり座る
てどうだらうか?

「ナイスアイディアー!」

「……何がだ?」

「はつ。しまつた、またも口からー…

「ジユノちゃん……私行く所ないの。」「…………ダメ?」

じてん、と首を傾けて（勿論右へ）胸の前で手を合わせてお願ひ

する。

「……おぐが普段の私ならしない。子供もこの利点を活かしてみたんだよ？」

「……その呼び方をやめたらいい」
「やつたあ！ 流石ジユノちゃん！」
「……」

喜んだ拍子に羽がバサバサと動く。

「ねえジユノちゃん。なんで私羽レあるの？」
「知らん」
「んま、いつか！」

今度飛べるか試してみよう。

と、いつわけで！

「ジユノちゃん、既レて今田からお世話になりますーーー！」

「パパ、ママ私やつたよー念願の異世界へ来れたよーーー！」

家族揃って中一病、もちろん私も中一病から抜け出せないーそんな音乃が小さくなつて異世界で生きるよーーー！
平和に（予定）異世界を満喫してみせるよーーー

アコシップ来たコレ！（後書き）

なんか始めちゃいました新連載！

思いつくと留めておけない性質なんですね！

「龍守」を放つておいてるわけでは……な、ないよっ？

「」生=「」生放送

親しくなくても遠慮なし

「ふんふんふんふんふんふんふん」
「

ムリだ！

「ジユノちゃん飛べない！」

「そのようだな」

翌日早朝に、ジユノちゃんとその他大勢のメイド達と外へ出て翼を動かしてみるが、全く飛べない。

「では俺はもう行く。いい子にしていろ
「はーい！」

ジユノちゃんの朝は早いらしい。使用人達に混じって整列すると、馬で駆けていくジユノちゃんを見送った。どこに行つたのか知らなければけど。

「さあネノ様。あちらで遊びましょ」
「うえ？」

遊ぶ？驚いて変な声出ちやつたよ。何故様付けされてるか分から

ないしメイドまで付いたやつたんだけど、私付きメイドになつた17歳のリニーはこの屋敷の中で最年少らしい。

「明日には色々なおもちゃが届く予定ですが、今日はあるもので我慢してください」

「うかうか。私小さい子なのか。何歳くらいに見えてるんだろうか？」

私が鏡で見た感じでは10歳くらいだつたけど……。

しかし！ 見た田それぐらいでも実際18歳なわけで、おまえ」となんて歳じやない。それに今日は探索したいんだあ！

「ヤだよコー！ 音乃是探検するのー！」

しゃべり方もわざと子供っぽくして我放題で行くつと頃つ。適応力はバツチリだ。すでに気分はお姫様。

言つておこう、私の辞書に『遠慮』という文字は無い。使えるものは最大限に活用する。

「ですがネノ様……」

「コー……お願い

ウルウルと瞳に涙を溜まらせ（出来てるか分からぬけど気分だけ）泣き声で（気分だけ）懇願する。

「わ、分かりました！ それではネノ様のお好きな場所へ参りましょ

よつしゃあ！……おつと危ない。思わず拳を突き上げる所だった。
翼はバツサアってなつちやつてるけどね。

「ありがとうリー！ 大好き！」

ちゃんとお礼は言わないとねーアメとムチ（？）が大事だよね！
さてやつぱり屋敷の情報を知つておくべきかな。

「ジユノちゃんのお部屋行く！」

「ジユノア様の、ですか……？それはちょっと……」

なんだなんだ！？妖しいものもあるのか？！違つか。そりや主の部屋は勝手に見せられないか。しょーがない、ジユノちゃんが帰つて来たら見せてもらおう。

「じゃあお家歩くー」

「はいそつしましょう。ネノ様、手を繋いでもよろしいでしちゃうか
？」

「うん、いいよー！」

歩きながら情報収集も忘れない。あ、手汗大丈夫かな？

「ジユノちゃんどんな偉い人なの？」

「ジユノア様は藍騎士団団長でいらっしゃいます」

「あい……？」

「はい。瞳の色から名付けられたものです。ラニッシュ国の人間は
目が藍色をしているので」

まつほづ。屋敷の雰囲気から偉い人っぽいことは分かつてたけど、

おまかの団長。

でもひこうの国せうわーうシロとこへりこー。

「藍騎十団の他に黒騎十団と白騎士団があつますが、藍騎十団への入団は最も難しく、更に団長となつますと国の英雄で、『わこまかー』

……「う、うむ。語りてこくつちにデンドン熱くなつてこくつーーだカビ、私が子どもとこい」とおれになこだわつか?

「ジユノア様が団長になられて7年。この國が敗戦したことなんて一度もあつませんわ」

まじですか。ジユノちゃんすいこね。

「ジユノちゃんんこくつなの?」

「22歳で、」

「22!?」

あぢやー、あの顔でかー(失礼)

思わず素の反応を返してしまつた。あの厳つい顔と鋭利な目で22といつのも驚きだが、7年前とこいとは15歳で、国の英雄と言われる団長に?

「うむ、ジユノちゃんおめでべし。

「あ、こいが浴場となつてこます。お好きな時に入るよつひとのこ

とです」

「わー、広づー。」

あまつの大わこーーの手を離し駆け出したら、コケた。

「ううう、痛い」

「ネノ様っ。すぐに手当を！」

ひょいと抱きかかえられてマイルームへ。

「申し訳ございません、私が付いていながらつ」

「リニーは悪くないよー。勝手に転んだんだしー。」

子ども相手にそんなに謝らなくともー

まだ若干痛む額にはリニーが丁寧に貼つてくれたガーゼが存在を主張していた。

「ですがっ、ネノ様の可愛いお顔に傷が！」

か、可愛い、だとう！？……いやでも確かに昔は可愛いった。昔の写真を見た後、今の私を見て両親が深々と溜息を吐くのを何度も見たことか。

小さい時は皆可愛いものだが、その中でも私は可愛かったと思つ。所詮過去だが。

だつて近所のおばちゃんにこの前言われたのだ。

『音乃ちやんったら昔は可愛いったのにねー。今じゃ遅しくなつてしまえ！』

つてオイという意味だ。地味に傷付くじゃないか。ああでも、そんな近所のおばちゃんにも会つことはないかな。

二二二二動画が見れないのは残念だけど、あと家族と会えないのも少し残念だけど、異世界に憧れて7年。あ、ジユノちゃんが団長になつた頃と一緒にだ。

てことは、私が二二二二動画に熱中＆小説読みながら異世界へ夢

見ている期間、ジュノちゃんは必死に団長務めてたのか。なんか温度差は物凄くあるが共通点を見つけた気分だ。流石ラツキーセブン。

「ネノ様……やはり傷が痛むんですか！？」

「あ、え！？ 違うよ、大丈夫！ ちょっと家族のことを思い出してただけ！」

「そうですか。……大丈夫ですよ。リニーが居ますからね」「うん……」

ジュノちゃん達にはトリップしてきたことは伝えてある。信じてくれたかは知らないが。

リニーはトリップが嘘でも親が近くに居ないとは思つていいようだ。だから今もこうして……私が寂しいと思つて抱きしめてくれているんだろう。

……グッジョブ胸！ あ、別に変態じゃないよ？ ただリニーは見た目によらずモフモフなもんで……あ、変態？

うーん、この胸に飛び込んでるのもいいんだけどまだ探索がない。無意識に翼をパタパタしているとリニーの手が頭を撫でる。

「ネノ様、お庭を散歩しませんか？ 今日は天氣が良いですし、気持ち良いですよ」

「ん、そうする」

名残惜しくも顔を離すと、再び手を繋いで外へ。

日中の陽気は暖かく、またも走り出したい気持ちに駆られたがリニーがガツチリ離さなかつたのでそれは叶わなかつた。

「ケた時にも思ったが案外力あるねリニー。可愛い顔してるくせにね。胸あるくせにね。うん、ずるいね。代わりに翼バツサバサしといったよ。

「ねえリー。ジユノちゃんいつ帰つて来るの？」

「そうですねえ……今日は帰られない予定でしたが、ネノ様の為に帰つて来るかもせんね」

「私の為？」

「はい」

それだけ言つと、優しく笑みを向けるリー。

「ジユノア様はお優しいんですよ」

「うん！」

いきなり現れた少女を住ませるぐらいだからね。

「今回のことは驚きましたが、ジユノア様はネノ様が怖がられなかつたことが嬉しかったんだと思います」

怖い？……ああ顔か！

うんまあ、熊とかライオン相手に顔で勝てそうな威圧感醸し出しうるもんね！っていうか怖かったけどね！剣に手かけてたからね！

「ジユノア様はその……お顔で損をなさる方が多かったので……」

寂しく笑うリー。もしかしてジユノちゃんが好きなんだろつか？美女と野獣の一歩手前みたいな図が出来上がるけど……。

「リニーはジユノちゃん怖くないの？」

「初めて拝見した時は恥ずかしながら……ですが、今は尊敬しています」

田を輝かせて語るリリー。ジューちゃん君も隅にわけないね！
……ん、あれ、眠くなってきた。これは子どものお昼寝タイムつ
てこりやつか。立ち止まって田を「パンパンシ」する。

「ネノ様？ 眠たいのですね？ お部屋へ戻りますか？」

ブンブンと無言で首を振る。せっかく気持ち良い陽気と風なのに
部屋に入るのは勿体無い。

「ではベンチに座りますか？」

「ん」

つれられてベンチへ座ると、ウトウトウトウト……手もつて体
力ないな。

「失礼します」

リリーの声が頭の隅で聞こえると、体が一瞬浮いてすぐに柔らか
なものが顔に当たる。これは……リリーの胸か！

ふわふわする意識の中、それだけハツキリ分かると次に声が聞こ
えてきた。……多分リリーの子守唄だろうけど……オンチだったんだ
ねリリー。

ああ眠いおやすみ……。結構子どももいいもんだと、小さく微笑
むと意識を手放した。

親しくなくても遠慮なし（後書き）

明けましておめでとひいざれこます！今年も私の駄文をよろしくお願
いします！

羊って何匹まで数えれば諦めていい?

۶۱ -

「ネノ様おはようござこます」

うーん……あつ、思い出した！

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

眠っている間に部屋に運ばれたようだ。
日が当たつていたであろう窓辺のソファにリリーが腰掛け、その
膝の上に私が乗つっていた。外はもう暗かつた。

「ジユノちゃんは？」

「まだ帰られていません。もう少しがかかるかと……」「そっか

団長つていうぐらいだからね。昨日がたまたま早かつたのかもしない。

「あちらで遊びませんか？」

あちら、と言われた方向を見ると……お、お人形さんですね？あれは。なんてこつた……18にもなつて……。

「……遊ぶ」

断る理由が見当たらなかつたのでショウがなく人形を手に取る。

「リカちゃん……」

「お名前決められたのですか? いい名前ですね」

違います。似てるんですけど。あんまり知らないけど。

「ではリカちゃんと遊びましょ!」

おぐ……17歳の年下とまさかお人形じりとせ。ええい、じりなりやヤケだあ!

「り、リカちゃんお着替えしよう!」

変に力んだ声になつた気がするがそこは見逃して欲しい。リカちゃんの服を脱がせてコニーを見る。

「あ、替えは……」

ほつ……!」の中から選べと。

「じゃメイド服で」

せつせと着替えさせると完成品をまじまじ見る。……これジユノちやんの部屋に飾るつてどうだらう。

「お気に召しましたか?」

メイド服のリカちゃん？

「……うん」

そう答えるしかないよね？ね？よし決めたジユノちゃんの部屋へ持つて行こう。

「それは良かつたです。次は何をなさりますか？」

「うーんと……」

いやもういいんだけど。人形遊びしたことないから何するのか分かんないしな。ポケモンなら分かるんだけど。

リカちゃんを前に腕組みして考えている私を微笑ましそうに見ているリニー。

うーうーと唸りながら私の首が右へ45度傾いた時、扉をノックする音が聞こえた。

「お食事の用意が整いました」

おお、もうそんな時間？

「ネノ様参りましょう。リカちゃんも持つて行きますか？」

「ううんいい」

それはもう速攻で答えた。真顔で。翼もバサツて開いて閉じたよ。

「分かりました。では参りましょう」

スッと差し出された手に、幾分か小さな自分の手を重ねると歩き出す。

・・・

夕飯時に言われた。明日になつたら可愛い食器が届きますので、つてすぐ申し訳なさそうに。別に普通でいいよ?とは言えない。遠慮しない私だけじゃこは言えないよ?

でもお風呂につかっては言わせてもらつた。

「一人で入れるよーー!」

うん。18だから。リニーがもんのすんぐ心配そつ見てたけどね。コケたからね。18だけど。

一緒に入るというリニーを押し切つて一人で入つた。でも長湯するもまた心配されそだから今日は高速で出た。

「ほら、一人で大丈夫でしょ!」

とかも言つといった。翼を最大に広げて。そういう、この翼洗うの大変つてか洗うもんなのコレ?なんで飛べないのコレ?なんで生えたのコレ?

結構大きいんだよね。しまえないから時々邪魔なんだよね。

で、今マイルームに帰つてきてあと寝るだけなんだけど…昼間寝過ぎた所為か全然眠たくない。

今何時?今くじら!……「めん。いやでもホントまだ早いよーー

「厨の私は今からの時間が本領発揮なんだーーそれを……寝るだとう！？」ムリだーー！

ジューちゃんもまだ帰つて来てないみたいだしどうじよりつか？…寝るしかないか。リカちゃんと遊ぶ気にもなれないし。

「……」

とりあえずベッドに入つてみた。田を瞑つてみた。羊を数えてみた。

「…………このままじゅうHンドレスだよー！」

240匹羊が通過したといふやめた。部屋出でどつか行つてみようかな。

「そうじょ」

でも夜一人じゃなんとなく怖い……リカちゃんがいるじゃないか。つてことでリカちゃんをしつかり抱きかかえて部屋を出る。きょうさきよろしながらリビングへ行つてみる。

「…………ネノ？」
「フー！」

びっくう！

リビングへ入つて適当に見ていると後ろから突然声をかけられた。
びっくりして翼がブワサアって開いちゃつたじゃん。

つてジユノちゅーんじゅーん！子どもの姿なのをいいことに思つたり正面からアタックしてみた。ビクともしなかつたよ。

「おかえり！」

「ああ。何をしていた？」

「眠れないから色々見てた！」

「夜に一人で部屋から出るな。危ないだろ」

口調は厳しいが私の頭を撫でる手はひどく優しい。慣れていない手つきだけだ。

「はーい」

「さあもう帰れ」

「やだ！ 寝れない！」

「それでも帰れ」

「やだ！ 羊240匹数えたもん！」

「羊…？」

「うん！ あ、ジユノちゃんの部屋で寝るー。」

子どもだからねー普段なら言わないからねー

「……自分の部屋へ行け」

「やあだ！ ジユノちゃんの部屋ーーー！」

「……今日だけだぞ」

「やつたあ！」

「額のガーゼはどうした？」

「ゴケた！」

「大丈夫なのか？」

「うん！」

「それは？」

「リカちゃんだよーーー」

「……」

テクテクとジユノちゃんについていくと私の部屋と少し違うアザインの扉が現れた。

ガチャリと開けてジユノちゃんが入つていくと私も足を踏み入れる。

殺風景ですね。

「どうした？」

「物少ないね」

「いつもはあまり帰らないんでな」

「そうなの？ これから帰つて来ないの？」

「……帰つて来て欲しいのか？」

「うん！」

子どもは素直が一番！

「……分かった」

「ありがとジユノちゃん！」

話し相手はいっぱい居た方がいいからね！

「もう寝ろ」

私の所より大きいベッドを指差す。

「ジユノちゃんは？」

「俺はソファでいい」

ちゃんとレディ扱いしてくれてるよ。驚きだよジュノちゃん。私まだり力ちゃん人形で遊んでる年頃だよ？
ジュノちゃんはさっさとソファへ行つて寝る準備をしている。私もベッドへ上ると、もぞもぞと動いて丸くなる。あーふかふか。あ、リカちゃんどうしようか。今更ジュノちゃんに渡すのも面倒臭いし枕の横でいいか。

……物音がしない。ジュノちゃん寝た？ もうと起き上がりた。ジュノちゃんの目が開いて目が合つた。

「……寝れないのか？」

頷くと真剣な目でこちらを見てくる。少し経つた後歩いて来るとそのまま隣へ入ってきた。

「寝るまでいてやる

疲れてるだろ？ 悪いねジュノちゃん。お礼にリカちゃん人形あげようか？

……試しに差し出してみた。

「なんだ？」

「あげる」

「……いや……いい

なんとなく戸惑っている気がする。大の男を翻弄するって面白いかもしねない。

リカちゃんは起きたら勝手にこの部屋に置こう。あ、

「ジユノちゃんいなくても部屋入つていい?」

「かまわない」

「ありがとジユノちゃん! もやすみ!」

「ああ」

「」の殺風景な部屋を、今度変えてお「」。メルヘンにならないよ
! 流石にかわいそつだからね!

リカちゃん人形を抱いてジユノちゃんの胸に擦り寄る。するとまたも不器用な手つきで髪を撫でられる。

ジユノちゃん顔に似合わず(失礼) 爽やかな良「」オイするんだ
よね。

それまで全く襲つてこなかつた眠気が不思議とやつてくる。ジユノちゃんとリカちゃんの(?) 暖かい温もりを感じながら夢へと旅立つた。

半つで何回まで数えれば諦めていい？（後書き）

ほぼ設定を決めていないので無茶設定が出てくるかと思します。気にしないでください
あまりにも気になつたら言つてください

人は顔じゃ分からぬ

そこで私は千歳を追うのをピタリとやめる。

「たかが……？」
「あ、いや、「」、「めん」
「ふ、ふふふ……」
「姉ちゃん……？」

私の食い物の怨み

ああ…夢か。

嫌な夢見た。全くバカ千歳ときたら私の大好物のレアチーズケー

キ食べておいて、たかがとは失礼な。あの後きつひつりみは晴らしたけども。
あー腹立つてきた。

思わず腕に抱いていたものに力を込めると、

「わやーー！ リカちゃん！」

スpon、と体が上と下に取れてしまった。お腹が出てるメイド服も、エプロンとスカートが分かれている状態だ。
び、びっくりした。これ取れるのか。お腹辺りで分かれてしまつたりカちゃんをよく見ると、案外簡単に取れる仕組みになっているようだった。

「全くもーびっくりしたなー」

ぶつぶつ文句を言いながら体を元に戻す。簡単に戻せた。いつも半分ずつのままジユノちゃんの部屋に飾つておこうか。

……そういえばここジユノちゃんの部屋だけ。

すでにジユノちゃんはいなくてもう出て行つたみたいだつた。どこ行つたか知らないけど。あ、城か。王宮？だつて団長だもんね。うーん……、平和に暮らしたいけど、王宮は行つてみたいな。王子様とか一回は夢見るじゃん？特に私、中一病だし……！！
よくジユノちゃんみたいなゴツツい顔（失礼）の人が護衛で後ろ歩いてたり……つてジユノちゃんについていけば会えるんじや……？

「今日聞いてみよつ

涙目＆涙声＆首傾きで攻めればいけるかもしない。よし、がんばるぞつ！—私の夢のために！バッサア！（翼音）

しかし！

向こうから亀過ぎに会いに来てくれた。

「何何？ この子？ 何あいつロリコンだったの？」

……皆さん大変です。現在、超絶美形が、私の目線に合わせながら微笑んでらっしゃいます。

口から出でる言葉はちょっと似合わないけど。でもそんなこと気にならないぐらい今の私は目の前の顔に夢中だ。

言っておこう、美形は大好物だ。中二病抜きにしても有り余るくらい大好きだ。リアチーズケーキと同等かそれ以上に好物だ。やっぱいやばい、翼がバツサンバツサンなるよ。

「ロ、ロイス様……」

遠慮がちにリニーがその人を呼ぶ。ロイス様？ この人も偉い人なのか。

「君、名前何てゆーの？」

ロニーを無視してロイス様は首を傾けながら「――」と聞こえてくる。それにドッキドキしながら答える。

「……音乃」

「そう、ネノ。ネノは何で翼生えてるの？」

それは私が聞きたい。そしてヤバイ。何がやばいって、この人の言つ、ネノ、つて響きが、ああ……！……変態？完全否定はしない。なんか若干ジユノちゃんと声似てるね。ああそういう、質問に答えないといと。

「……わかんない」

「そう。ネノはジユノアのどんな所がいいの？」

ジユノちゃん？

「ロイス様……！　ジユノア様とネノ様はそのような
「君には聞いてないよ。……まあネノ？」

「」の人めぢやくぢやカツコイイけど、ひょっと怖い。ジユノちゃんと同じ、藍色の瞳と銀髪。

「ジユノちゃんは

「

優しくて、と続けようとしたんだけど、いきなり笑い出したロイス様によつてそれ以上はしゃべれなかつた。

「あつはつはつ！――じゅ、ジユノちゃん！――やべつ、止まらねつ。ぐはつ。ジユノ……つ、ぶはつ」

なにがそんなにウケたのか分からないが膝をついて体をくの字に折り曲げながら未だ大笑いする超美形さん。

しまいに、ゲフッ、とか言い出したが大丈夫だろつか超美形さん。

「くつく、「めん」「めん。あの顔にジユノちゃんね。俺も今度呼んでみよ。くくつ」

まだ完璧に笑いが収まらないらしいロイス様だけ、私の頭に手を置いて軽い謝罪を繰り返す。

「あー笑った。「めんねネノ。でも分かつた、ネノはジユノアが大好きなんだね?」「うん、俺も嬉しいよ。あいつにこんな可愛い子が……」

「ロイス。何をしている」

あ、ジユノちゃん。今日は早いね。

ロイス様の言葉の途中で息を切らして入ってきたジユノちゃん。私とロイス様の間に入ると私を庇うように立ちはじめてロイス様を見下ろす。

……ジユノちゃんどうほしーなー。ロイス様が見れない。

「ちよつとちよつと、お兄様を呼び捨て?」

「え!?」

驚きの声を上げた私を無視してジユノちゃんは続ける。

「何故ここにいる」

「ん~? ジユノア……違う違う、ジユノちゃんお気に入りの女性を見に来た」

ロイス様は楽しそうに、「ジュノちゃん」の部分を強調しながらしゃべる。

ジュノちゃんの顔は見えないが、目の前の拳が震えた気がした。

「……帰れ」

「えへ、ひつどいな。そこの子、えーっと、リニー？ お茶お願

い

「はいっ！」

名前を呼ばれたりーーは目を輝かせて飛んでいった。分かるよ、その気持ち。美形に名前呼ばるとテンション上がるね。

ロイス様が動く気配がするとジュノちゃんも動く。おかげでロイス様が見えるようになった。っていうかさ、ロイス様言つたよね？

‘お兄様、つて。え？ この2人が？’

開けた視界で交互に2人を見る。……イヤイヤ。（地味に失礼）

「ネノも座りなよ」

「——」と自分の席の横を勧めるロイス様。つられてフラフラ歩き出すと、がしつゝと腕を掴まれた。

「危ないからこっちに来い」

おうおう、せつかくの美味しいチャンスが……！ 翼をバサバサして抵抗の意を示してみるが伝わらなかつたらしい。

結局ジュノちゃんの隣に落ち着くと、リニーの淹れてくれたお茶をズズズズと飲みながら2人の会話を黙つて聞く。

「それ茶飲んだら帰れ」

「ふふつ、そんなにネノが大事なの？」

「おまえが近づくと穢れる」「

「中々言つてくれるけど、ジユノアにロリコンなんて趣味があつたとは知らなかつたよ」「

「……何の話だ」

「まだネノは小さいんだからさあ、無理はダメだよ?」

「バカか。ネノはそのような対象ではない。おまえと一緒にするな

「あ、違うの?」

「当たり前だ」

「なあんだ。折角ジユノアにオンナが出来たと聞いて飛んで来たのになー」

「……何処の情報だ」

「ん? ヒミツ。あーあ、護衛撒くの大変だつたのになー」

「おまえはもう少し王子の自覚を持って」

王子!?

お茶を口に含んだまま、キラッキラした目でロイス様を凝視する。

……ん? ロイス様が王子なり……

「それを言つならジユノアの方でしょ。ジユノアは第二王子だけど、俺ら王位継承権放棄するからジユノアが王になつてよ」

「ブバツ」

「ネノ様!!」

思わずお茶を噴出してしまつた。それはもう見事に。翼もびっくりして全開だよ。

だつてね、だつて……ジユノちゃんが、第二王子!?!?

この顔で!?(超失礼)

「!」「ごめんなさい……」

「ううん、いいよ。大丈夫?」

「ク」「クと頷くと、コニーと他のメイド達が拭いているのを手伝おうとする。が、リリーは田線で制された。

「その様子だと、言つてなかつたのか」

「……言つ必要がないだろ?」

「もう? 別に言つてもその子は変わらないと思つね? それより、どこの国の子?」

「分からぬ。本人は別世界だと言つてゐるが……」

「へえ……。本当?」

「日本つて聞いたことがありますか?」

「ううん。そこから来たの?」

「は」

「ふうん。不思議な話だけ? 瞳の色がねえ」

「ああ。黒の瞳は見たことがない」

え! そうなの?

「で? ジュノアは隠そつとしたわけ?」

「そうじやないが……ネノが慣れるまでは、と思つただけだ」

「……ネノ王宮に来るかい?」

「ロイス、俺の話を聞いていたか」

「いいじゃん。この子は大丈夫だよ。ねつ? 来る?」

なんだろう? この美味しい展開。
来るかって? そりや……

「行く……」

「ほり」

「……まあネノがいいならいいが

「じゃあもう行こつか

早っ…

「リニー、おまえも来てくれるか?」

「はい! 喜んで!」

「それからジニース。届いたものは王宮へ送れ

「畏まりました」

メイド長と思われる人が頭を下げる。

どうやら、夢の王子様に会えた上、王宮にも行けるそうです。まあ興味あるのは王子で王宮に興味ないんだけど。

あ、あと……人は、見かけによらないよね。
なんてジュノちゃんを見ながらしみじみ考えてたなんて内緒だ。

人は顔じゃ分からない（後書き）

ダメだ！宿題やつてない！！
誰か力を…！！

苦勞人？ それは俺を指す言葉です。

わーお。デカつ！ 広つ！！

馬車から降りて見た王宮は予想以上に大きかった。子ども視点だから余計そう見えるのかもしれないけど。

圧倒されていると視界に、焦るよじごどどどと走つてくる人が見えた。

「ロイス様！ つてジユノア様も！？」

その人は、超美形王子ことロイス様の元へ来ると私を見つけたようだった。うん、そこそこ美形。ロイス様には負けるけど。

「脱走話は後で聞くとして、その子どもは？」

その人の感じから、どうやらロイス様はよく‘脱走’をするらしい。

「ネノだよ。これからここに住ませるから

「はっ？！ ついに幼女にまで手を！？」

「違うよ。ね、ジユノア？」

「……ああ。俺が保護した」

「ジユノア様なら確実ですね。分かりました、部屋を用意します」

「もう一つ用意しろ。侍女を連れて来た」

「分かりました。今からどうされるので？」

「訓練場に戻る」

「えつ。……訓練の途中だつたんですか？」

「そうだつたの？」

そんな田をジユノちゃんに向けると、ポンと頭に手を置かれた。

「そうだ。また後でな」

「うん。じゃあねジユノちゃん…」

「ジユノちゃん…?」

その人がそう叫んだ瞬間、ジユノちゃんはギロツとその人を一睨みし、そのままどこかへ歩いて行つた。

「ジユ、ジユノちゃん…」

何でそんなにショックを受けてるんだりつか。

「くくっ、やつぱりそつなるよな。あー、レイルはどうひきつかな~」

「……いいんですか?」

「いいだろ。ジユノアガがいいみたいだし。さて、俺は女の子の所にでも行くかなあ」

「え! ? ダメですか…仕事あるでしょ…」

「え? ? 硬いこと言つなよ」

「硬くないですよ…どれだけ溜まつてると思つてるんですー?」

「んん? 僕は溜まつてないよ? 每日発散して…」

「何の話ですか!」

「どうか、ロイス様もどつか行くのか。もうちょっとと美形拝みたかったのにな。……あつ。」

「ねえロイス様。お城、案内して？」

「そう言つと、ロイス様は私を見る。私は美形を拝みたいし、ロイス様は仕事から逃げたい。丁度いいじゃないか。

ロイス様はしばらく私を見てたけど、突然にやつとした。

「いいよ。今日の午後の時間はお姫様にあげる

「何勝手なことを言つてるんです！？」

「勝手じやないよ。ジユノアだつて良いって言つときつと。ネノに好きなことさせりつて言つてたし。ねえリニー？」

「ええ！？」　あ、はい！　

いや言つてなかつたと思ひ。

「それなのにユザはダメつて言つの？まあ俺はいいけど？後でジユ

ノアから何言われるか知らないよ」

「ああもう分かりましたよー！　どうぞどうぞー。お好きに何でもやつてください！」

つこに投げやつになつたこの人はユザと言つらしこ。呼び捨てがしつくづくくるので勝手にユザと呼ばせてもらひ。

「あ、そう？じゃあユザも一緒に同行しようか

「いや俺は他にすることが……」

「ネノ、ユザも一緒にいいよね？」

「うん！　ユザと一緒にいー！」

「まひ」

「……」

ユザは開いた口を静かに閉じて、がんばって色々飲み込んだようだつた。苦労してそうだね、ユザ。そのうちハゲてきたりしてね。

「よし行こ。ああそういう。ロイス様なんて堅苦しい呼び方しなくていいよ。あのジユノアをあんな呼び方してるんだから俺にもなんか考えてよ」

あんな呼び方ってそんなに酷かつた?まあいいや……ロイスだから……

「アイス!」
「やめようか。ロイスでいいよ」
「……はい」

おお怖い。目元が笑ってなかつたよロイス。思わず翼も縮こませちゃつたよ!

城を案内しながらロイスは色々話を聞かせてくれた。ロイスは外面でもあるのか、今は言葉遣いが違つていた。最初から王子っぽくなかつたが、今はもつとそれを感じる。顔は間違いなく王子様だけど。

「昨晚ジユノアが大量に、何か、を注文したつて城で噂が広まつたんだ。当の本人は知らないだろうけど」

噂とか疎そだもんね。

「あいつの顔だから女なんてまともに寄つて来たことなかつたんだ。性格は本当は良いんだけど、外見から離れてて分かりにくいし」確かに。

「んで、そのジュノアが自ら店に足を運んで、物を大量に買つたっていう噂が飛び込んで来てな。もうこれはオンナだらうと。だから俺もその店に行つて店主に何買つたか聞いたんだけど、震えながら答えてくれなくてな。仕方ないからどこに送つたかだけ聞きだしてジュノアの屋敷だつたから、もしかしたら一緒に住んでんのかと思つて向かつたのさ。そしたらまたかのロココンだつた」

いやロココンではないと思つ。ロイスは機嫌が良いのかよくしゃべつていたから、しつちからも友達感覚で接してみた。

「ロイスつて王子様っぽくないね
「ネノ様つ……！」

リニーが後ろから咎める声がしたけど、ロイスは気にした様子はない。

「ああ、俺王子とかヤだしなー。子供もの頃は自由で良かつたなー」「今もロイス様は十分自由です」

「ザザは引き攣った顔で叫びだる。

「足りない」

それをアッサリ否定するロイス。ついで王位継承権がどうとかつてたき言つてたな。

「ロイスは次期王様なの？」

「んーん。俺絶対ならない」

「ロイス様！」

「じゃあジユノちゃん？」

「俺はジユノアがいいと思つてるけど」

「ジユノア様は第三王子ですし、すでにこの国を団長といつ形で守つておられてそれは難しいんです！…」

「だからゴザガがんばってジユノアの代わりになればいいんじゅん…」

「……っ、努力はしていますが、残念ながら遠く及ばないでしょう。ジユノア様は別格過ぎるんですよ」

「まー知つてるけど。あーあ、レイルなつてくれないかなー。つて

レイル今何処？」

「……分かつていません」

「はは、また逃げたんだ。今度はいつ会うかな」

レイル？

「レイルって誰？」

「俺の双子の兄」

「ロイス双子だったのー！お兄ちゃんもカツコイイ！？」

「ああ、お兄ちゃん『も』カツコイイな。俺の分身だからな」

なんてこつた！超絶美形が2人…？「これは…これは…やばいやばい鼻血出やつ。

「ネノ…？ どうしたの？」

「なんでも！」

早く会いたいな～。イケメンのツーショットでテンション上がるよね！あ、私だけ？そんなことないよね！やつばいなー。翼がバツサンバツサンなるなー。あ、ごめんゴザ邪魔だつた？

「ん～、訓練場がここから近いけど行くか？」

「行かない！」

それはもう即答で。

「ジユノアいるぞ？」

「行かない！」

むを苦しい所はイヤだよー！

「じゃあ戻るか」

むふふ。

え、怪しい？ しょうがないよ。だって今美味しいシチュエーションなんだから！ 邪魔しないで！ あ、涎垂れそう。

「ネノ、王宮は好きになれそうか？」

「うん！」

「俺も好きか？」

「うん！…」

そりゃもうイケメン大好物ですから！

「将来性ありそ娘娘だから今から予約しどくかなー」

「何をです……？」

恐る恐るという風にコザが問つ。

「ネノの婿」

「はあっ。嬉しい！ 嬉しいんだけど数年後私は突然変異が起きて、今（10歳）と比べて期待ハズレの顔に成長してしまうんだー！ ……無意識にロイスの胸に頭をグリグリ押し付けていたようで軽く剥がされた。

「痛い」

「ごめん」

リニーは微笑ましそうにこちらを見ている。傍から見たらキラキラの王子様が愛くるしい天使を抱いているように見えるんだね。

今私は座っているロイスの膝の上にいて、ここはロイスの部屋らしい。ジュノちゃんの部屋と違つて色々物が飾つてある。

「ロイス様……。幼女は勘弁してください」

「何も今つて言つてないだろ？俺好みに自然と育てとくべきかなつて考えただけだ」

「ロイス様！！」

「ねえねえ明日どうするの？」

「俺は女の子の所」

「じゃネノも行くー」

「ネノも？困ったなー。両手に華だな」

「ネノお華？」

「ああ。ネノが大きくなつたら俺と結婚しようか

「する！…！」

もうすっかりロイスとは友達気分である。ゴザはスルー氣味で。

「そうだ。甘いのは好きか？」

「うん好き」

「いい物やるよ。この前見つけたんだが……ゴザ

「はいはい」

分かつたらしいゴザは立ち上がり棚を開ける。可愛らしい飴玉の
ような包みを持ってくると、ロイスに渡した。

「ほら。全部持つてけ」

「ありがとロイス！ 大好き！」

「俺もだネノ」

「ちょっとロイス様。限度を考えてくださいね？」

「嫉妬かゴザ？ 男の嫉妬は見苦しいぞ」

「見苦しいゾ！」

からかっている口音を真似て言つてみた。

「あのね……。はあ……」

本当にゴザはハゲてぐるんじゃないだろ? 今度グチを聞いてあげよ!。

知らない人から物を貰つてはいけません

ロイスはホントに女の所に行つたらしい。ゴザが諦め氣味に話してくれた。

それから案内してもらつて、私は一人で図書館に来ている。昨日ロイスから貰つた飴のよつなお菓子を口に入れながら適当に歩く。

広い図書館の狭い通路を進んで行くと、古びた扉が現れた。

「むう……」

こういう扉はアレだよね。魔女がどうたらこうたらとかよく言つよね。ね？

ちょっと怪しいけど開けるのが好奇心旺盛な人間つてもんだよね？

ん？翼に違和感を感じる……。なんかむずむずする。が、気にせず扉に手をかける。

「開いた」

そこは小さな部屋だった。机と椅子と窓が一つずつ。埃っぽくはなくて、人が出入りしていないわけでもなさそうだ。なんだ、秘密の扉つてわけでもないのか。

椅子に座つて机の上に置いてある薄い本を開いてみた。

……「うーん、やっぱリトリップオプションのかなー。初めて見る字が解読出来ちゃうんだけど。

表紙には【最高魔法全書】と書いてある。ペラリとページを捲ると【氷】と出てきた。色々殴り書きがしてある。

【後楽に光を 前世に償いを 満ちたるは青 想いは霊となり降り
注ぐ 求めしは至点の絶氷】

呪文? よく分からぬけど、ペラペラ捲ると【炎】【風】【雷】の魔法がそれぞれ記してあった。

そして最後のページには【究極奥義】だつて。ゲームか!

【晴天に揺らめき炎は灼熱と化す 白雲に漂いし霧は氷結を成す
黒雲に渦巻くは猛然の雷 空に走るは一陣の風】

今度言つてみようかな。使えたうじょうしよう。……まあムリか! 椅子の背もたれにドカつともたれて、もう一つ飴を放り込む。しばらくそうして口の中で転がしていくが、窓の外が気になり、カリカリと噛みながら窓を開けた。

「森……?」

広がる縁。乗り出し氣味で眺めていると、突然体に異変を感じた。

あヤバ……

思った頃には遅かった。急降下する体。意識はそこで途切れた。

目が覚めたら森の中について、小川の近くに落ちたようだった。しかし周りを見ても上を見ても陽気が差し込んでいるぐらいで城は見えない。

どこも痛くない体を不思議に思いながら立つと……低い。視線がとっても低かつた。

嫌アな予感がバンバンしながら小川を覗くと……『写ったのはクリクリな目をした可愛らしい仔犬。きつちり翼付き。

「ワン……（ふつ…）」

じゃねえよオイー！！

الطبقة العاملة

ねえ パレードー いう パートー? ..?

なんで？なんで！？なんで犬！！？

幼稚化トリップ with 翼
の次がなんで犬！？

第二章 バンテリスとミミズク　あたしの馬鹿　一　甘い　こ

「わおーん……！？」

腹いせに精一杯鳴いてみた。…自分で言つのも悲しいが、負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

「ルーラー」

情けない声を出しながら森をトボトボと歩く。何も出したくて出しているわけじゃないよー悲しい声が勝手に泣かせてしまうんだよーー何でこんなことに?思い当たるの?……

「グワン！！（飴か！！）」

口イスめ！覚えてろ！！

メラメリと心に炎を燃え上がらせていると、何かが森の奥から走つて來た。

あれじやないですかね。あの……

猛 獣 !

「ギャウー！」

逃げねば――！

ソイツはドンドン近づいてくる。今私の何倍もあるソイツが合図つと、恐怖に足が竦んだ。

「あやうん……。キヤンキヤン……！」

ジユノヒヤーン――ぐるふ、ぐるふみ――！

しかしソイツは直接襲つてこず、口を開けた。

「？」

と、

なんか炎の玉迫つてきた――！

そうかそうか、この世界は魔法があるのか――動物も魔法使うのか――！

当たる直前、思わず翼を前に出して、防御の体勢をとった。……

ん?熱くない?

翼を広げてみた。ソイツは不思議そつにこちらを見ていたが再び

口を開けた。

今度は数個の氷の塊が迫ってきた。
もう一度翼を盾代わりにしてみる。何か当たった感じはしたが痛
くない。

……あれですね。

翼最強フラグ

でもこれ防御には使えるけど、どうやって攻撃すんの？
突進？そんな勇気ある行動出来るわけないでしょ！

翼最強説が浮上したおかげでちよつぴり強気になつた私はソイツと強く睨みながら対峙する。

そこへサク、と左の方で枝を踏んだような音が聞こえると、続いて

「『駆ける想いは疾風となる 見つめる先に吹くは正か負か
に追うは誰が為 迎える終焉に突き立てる風刃』」

つい先程、本で読んだ呪文が聞こえた。そしていつの間にか、目の前のソイツは血だらけで地に伏していた。

ちよつとちよつと、ケロいんできまし。
恐々声のした方を向いてみる。

「うわん！（ロイス！）」

そこに立っていたのは超美形ことロイス。髪色は昨日と違つて金
だつたけど、あの整い過ぎてる顔はロイス。
なんでここにいるんだろう？今日は女の所じゃないの？髪金に染
めてきたの？あの鉛はなんだ！

「なんでここにいるんだろう？　今日は女の所じゃないの？　髪金に染めてきたの？　あの飴はなんだ！」
等々問いたいことは、ゴザの抜け毛ぐらいあつたが（知らないだけ）、ぱぱい抜けてそつじやん）、とりあえず礼は言ってやる！

「うおーん! (あつがとーー!)」

だだだ、と走って行つてジャンプすると、受け止めて抱きしめてくれた。

「はは、そんなに怖かつた? よしよし、可愛いなおまえ」

なんか口イス性格違う？

「くんくん！（音乃だよ！）」

翼をバサバサと動かす。

「珍しいな。どこから来たんだ？」城へ持つて行くか……？でも

なんか一人で悩んでいるらしいロイス。早く私と気付いてくれないだろうか。ジユノちゃんだったら分かつてくれるかな？

なあ

「ワン！ クン……」

「何だ?
お腹空いたか?」

違います。城へ行こうって言いたいんです。

「森を抜けながら決めるか」

どうやら一人で納得されたようです。

「のまま戻らなかつたらどうしようか…そしたら戻むがコノニヤロ
ー！」

そんな田線をロイスに送つたが、全く通じていないみたいで頭を撫でられただけだった。

まつたく！ そんな手口には騙されないからね！ 撫でられてウトウトするぐらいい気持ち良いとか思つてないからね！！
「ひなりやシンテレでいってやるからね！！

「眠いのか？ 置いていかないから、眠ればいい」

そそそんなテレ出そう作戦に引っかかるからね！ でも眠いよ
！！

「どうした？ 寝ないのか？ 名前はそうだな……珍しいからなあ
……。^チ珍でいいか」

待て。

眠気も吹っ飛んだ。

「グオン！ ウワウ！… ギヤウ！…！」

「そんなに氣に入った？チン」

「グオウ！（イヤだー）」

なんて会話（？）をしていると森の出口が見えてきた。元々城か

ら落ちたんだから近かつたんだろうけど、一人じゃ当分抜け出せなかつただろう。

「さー、今日は何を言われるかなー」

「クン?」

「ん? グザつていう面白い奴がいるんだ。アイツも俺達より若いのに大変だなー」

ユザ。良かつたね、面白い奴だつて。

森を抜けて空を見上げると、少し飛び出している部屋が見えた。

恐らくあそこから落ちたんだろう。

無傷だつたのは翼のおかげ?

黙つて考えている私の頭を相変わらず撫でながらロイスはゆっくり歩く。

細い道や入り組んだ道を進むと、城の中に入ったようだつた。ようやく広い場所へ出ると、兵士が何人もいて一人がこちらを向く。

「レイル様! !

「ただいま!」

レイル?

ポジティブは素晴らしいが時に厄介である

レイル……レイルレイル……どつかで聞いたような……

「……ブォン！（双子兄！）」

しまった、興奮が声に出ちゃったよ。

「どうしたのチン？ 大丈夫？」

いきなり奇声を発した私を怪訝そうな目で見てくるロイス。……
じゃなくてレイル王子。

なんてこつた。流石双子。ロイスと顔似過ぎだなオイ。それとチ
ンじゃないよ 音乃だよレイル君。

「クウン……」

周りの視線とさつきの奇声を思い出してちょっと恥ずかしくなり
ながらも大丈夫と返事をする。伝わってるか知らないけど。

「レイル様、今まで何処に……」

大勢の兵士が頭を下げる中、一人が前に進み出て、言葉を発す。

「ん？ 内緒。俺とチンのヒミツ」

「わふう（チソジヤネエよ）」

「チン、とは？」

「この仔。かわいいだろ？ ジリで飼つておし

「レイル様！…！」

レイルがしゃべって居る所にもうダッシュで走ってきたのは、ハゲるヒ尊（私の中で）のコザ。

「やあコザ。久しぶり～」

「久しぶりじゃないですよ！ ビに行つてたんですか！」

コザは一田散に走つてくれると、乱れた服を整える事もせずしゃべり始める。

「だから俺とチンとのヒミツだつて」

「チン！？ つてその獣は？」

「この仔がチン。ミシユケルゲに襲われてる所を保護した。ジリで飼つから」

「はあ！？ そんなまだ安全かも分からない獣を置くなど…」

「大丈夫だよ。な？ チン」

「うわん！（チソジヤないけどねー）」

「ほら」

「なにがほらですかー！ つてこの翼、ビリかで見たよーな…」

おお、コザその調子…思い出して…つむかつき見たでしょー！

「ジリの翼珍しいだろー！ ミシユケルゲの攻撃も防いだんだ」

「え？ ミシユケルゲの？…… ところが、レイル様は森にいたんですね？」

「あ、しまった」

「つかりしゃべっちゃひたらしいレイル。ミシュケルゲというの
はあの猛獸のことだらうか。
ん？なんで攻撃防いだこと知ってるんだ？……ずっと見てたのか
！…すぐに助けてくれたわけじゃないのか！」

「うううううううううう

「コンニヤロー」という意味をこめて、とりあえず低く唸つといった。

「唸つてますけど」

「だろ？俺に懷いてるだろ？」

「そ者は見えませんけど。唸つてるんですけど」

「分かつてないなあ。これは照れ隠しさ」

待て。なんか会話おかしくないか。なぜレイルは得意氣なんだ。

「俺に懷かない動物なんていない」

まあ今は犬だけさ。元人間だからね。
顔がいいからって全ての女が落りると思つなよ……

「グルルルッ」

「唸りが酷くなつてますけど」

「ははっ、シンテレだなあ」

そう笑いながら頭を撫でるレイル。なんというプラス思考。いや

ナルリスト？動物に？

撫で方が絶妙で甘えたい気分になるが、そこは我慢。そうだ、口

イツは私がピンチの時に傍観してたんだ！

「ん~、IJの翼触り心地いいな。なあコザ、そつ思わないか？」

レイルが言つと、コザが手を伸ばして来て、翼に触れようとある。

「グワン… グルルル…」

牙剥き出しで睨みつける。乙女のお顔が大変なことになつていて、気がするが今は犬。気にしておこづか。

触ろうとしたコザが悪い。誰がコザなんかに触らせるかー触つていいのは超イケメンだけだ…！

「くくつ、嫌われたな」

「なんなんですかもう…。まあいいです。レイル様は部屋に戻つてください」

「え~、なんでだよ」

「仕事が山積みでしそう。その獣も一緒でいいですか」

「え~。あ、そういうえば、ジユノアの女は？」

「え？… ああ、どうも勘違いだつたようですよ」

「勘違い？」

「はい。さあ、部屋へ」

コザはこの話題を早く終わらせたいみたいに思えた。ジユノちゃんの女の話は私だよね？まあ確かに勘違いか。まさかの幼女だもんね。

「まあまあ、一服してからにしょーよ。ね？」

「……分かりました。では用意を致します」

「さあすがコザ。分かつてる」

軽くユザの肩を叩くと、レイルは歩き始めた。

着いたのは殺風景な部屋だった。物は少ないけど、難しそうな本が数冊置いてある。

ベッドがあるということは誰かの部屋？ロイスの豪華な部屋からして、レイルという可能性は低いような。双子つて好み似るんだよね？

来客用にしては広い気もするし、うーん。

「ふー、やっぱり我が家が一番だねえ」

我が家つか。広いな。

「そう思つなら大人しく城に居て下さこよ」「ん~、でもやっぱり刺激は大切だからしづがないよ」「こっちの身にもなつてください」「大丈夫、そう簡単に死なないよ」「そうじゃないでしょ?……」

レイルとユザが痴話喧嘩（違つ）してゐる間、自由になつた私は部屋をトテトテと歩く。

……ベッドの下にエロ本とかないだろ？

……なかつた。

「わふん」

ちょっと残念。

「チン？ 何してんの？」
「わふ……」

「わふ……」

後から行く！
せつかくのイケメンからのお誘いだけじ、今忙しいの……そんなに
軽い女でもないの！
そんな深い意味を込めて返事をすると、またトコトコと歩く。

「……そつか、『めん。俺が軽率だった

あれ？なんか通じちゃってるよー…どんだけ乙女心に敏感だよー…い
や動物限定？

びっくりして振り向くと、フッと微笑まれた。

ああ、一回りや落ちるわ。……私以外。そういう、何度も言つが、顔
が良いからって全ての女が落ちると思つなよー…

……ん？なんか見覚えのある物が……。

「うおふつ」

「チン？ なんかノドに詰まつた？ 食い意地張つちゃダメだよ」

違います。拾い食いなんてしてません。どうも懐かしき力ぢゃ
んが見える気がするんです。

レイルが歩いてきて私を再び腕の中に収める。

「ほり、口開けてみ？」
「ワウンー！」

食つてねえよー

それより何でリカちゃんいるの！？

「痛くしないから……」

「グルル」

「大丈夫、すぐ終わる」

「ウウウッ」

「チン、いい子だから力抜いて？」

「クーン」

「……なんか段々違う場面が浮かんできたんですけど」

「何ユザ。欲求不満？」

「いや違いますけど。普通に口開けさせたらいじやないですか。あとチソって名前おかしいと思つんですが

「そう？ チンも氣に入ってるようだよ？」

「ガルルルル！」

「……氣に入ってるんですかソレ？」

ユザ！偶には良い事言つ！つていうか、そろそろ氣付け！翼を思い出せ！

「ワンワンー」

ユザに向かって翼をバタつかせながら吠える。

「なんですかいきなり」

「どうしたチソ？……ちょっと翼落ち着かせて欲しいんだけど」

「わふ」

あ、ごめん。

レイルの腕の中でバタつかせた結果、ユザに全く伝わっていない

拳句、レイルに迷惑をかけた模様。

うーん、どうしたら伝わるだろうか？

少し気分も翼もショゲ氣味に考えていると、バンツと扉が開いた。

「よおレイル。やつぱり帰つてたか」

「ああロイス。ちょっと面白い動物を発見してな」

現れたのは今度こそロイス。その髪は昨日と同じで銀髪だった。こうして見ると本当にソックリだ。銀髪と金髪の髪色ぐらいしか違いが分からない。

交互に見ていると、ズイツとロイスの顔の前に体を持ち上げられた。

「かわいいだろ？」

「そうだな。俺はお嬢ちゃんの方がいいが」

「グルッ！」

「うおー！」

惜しいー…あとちょっとでロイスの鼻を噛めたのに。

「なんだ人見知りか？」

「グルルルウ」

ロイスめ！あの餌のせいでのんな事になつてるんだ！

「小型な割に凶暴なもん拾つてきたな」

「俺に対してもなことはない」

「顔は似てんのにな……んつ？ ここの翼どこかで……」

「わふっ！」

おおおロイース！分かつてくれたひ今回のはなぜキャラにしてあげるーー！

「……いや『氣のせい』か」

「わふうー！」

早ツー！『氣のせい』じゃないからーー！

「だろ？ だつて俺も初めて見たし」

そりやアナタは森が初対面でしたからーー。

「ああ、やうだな。見間違えだ。よくあるよ〜ある

よくないよーー！」

これだけ綺麗な翼を何故忘れるーー？早く『氣付けよ、ロイースもコ
ザもーー！

持つべき友は外見ではなく内面

「で、『マイシ』飼うのか？」

「コイシジやなこよ。チンだよ」

「グル」

違うよ 香乃だよ。

「チン頭いいみたい。多分」「うちの言葉理解してる」

「わふ！」

「ホントか？ ジャあチン。俺は起きたら女にキスをするか髪を撫でるか、どっちが先だ？」

「グオン……（知るか！…）」

どんな質問だ！ てつきり、右手挙げてとか言われるのかと思いつて手準備してたのに…

「分かつてないぞ？」

「おかしいな……」

おかしくないよーむしろそいつがおかしいよー…

「ワン！ ウオウ！ ギヤウ！」

「さつきからなんか訴えてるよつて思えるよ

「そうだな……」

そうだよー

「ジユノアって動物と会話出来たつけ?」

「あー、どうだつたかな。出来そうだな……」

「わふう」

顔は野生の王だもんね。

「失礼なこと考えてません?」

「そんなことないよ。ジユノアは今どこに?」

「訓練場です」

「ふーん。……行く?」

レイルは私を見ながら呟く。うーん、早く分かつて欲しいけど……

「グルル! (汗臭いのはイヤ!)」

「そつか。それじゃあジユノアが戻つてくるのを待とうか

だからなんでそういうのは伝わる!?

くそ、この美味しい状況を素直に楽しめないなんて!

超イケメン二人と部屋に居るというのに(コザ?……居たつけ?)

こんな姿じゃ抱きつけない!?

「おい、どうした?」

どうしたものこうしたも、全部おまえの所為だ!

でも……でも責めきれない! だってやつぱりカツコイんだもん

……!

「うひち来な

もう言ひてロイスはレイルの腕から私を引き抜く。

「うひひひ

あなたの所なんて行きたくないんだからつ。か、顔がいいからつ
て騙されないんだからね！

「唸つてるけど……しつぽ、揺れてるぞ？」

「うぎゃやうつ」

しまつたあああ！

この正直者め！！！ そんな意味を込めてしつぽを思い切り噛んでみた。

「ギャン…！」

いいいイタイッ。

皆わん、犬のしつぽは大事にしましょう。

「くく、可愛いな「イツ」

「だからチンだつて」

「わふつ…」

だから音乃だつて！

「んー、よじつ」

何かを決めたらしいレイル。ユザは何かを悟つたのかすごく嫌そ

うな顔だ。

「ユザ。ジュノア呼んで来て」

「無理ですよ！ 今訓練中ですよ！？」

「ほら早く。チンもそいつ言つてるよ？」

「ワン！」

「そうだ！ 早く行けユザ！」

「知りませんよー」

「二人の名前使つたら来るだろ。ユザ行つて来い」

「ロイス様まで……！ ああもつ分かりましたよー！ それでは行つて参ります」

パタン、と閉まつた扉。ロイスは私を抱いたままドサッとソファに腰掛ける。

「レイル……王になれ」

静かなロイスの声。向かい側のソファに座つたレイルは私の顔を見る。

「嫌に決まつてる」

「ユザがうるさいんだ」

「はは。本気で家出する？」

「ふつ、出来たらしてる。ジュノアはよくやるよ」

「なんで俺等が先に生まれちゃつたのかなー。ジュノアが先に生まれてたら押し付けてたのに」「今でも結構押し付けてるけどな」

そうなのか。

「大体俺はもう王になってるし」「それ動物界のだろ。しかも自称「バレた?」

サラサラの金髪を揺らしながら、茶目っ氣タップリにレイルは笑う。……ダメだ、惚れそう。顔が良いくて絶対得だ。

「ロイスがなつてよ」「イヤだ。レイルの方が合ひだろ」「どこらへんが?」「金髪」「わふ」

待て待て。

「ほら、チンもそつ言つてるだろ」「グル」

言つてないよ。

「でもさあ、冗談抜きにそろそろ考えないとね」「ああ」「あ、良い方法思いついた。……ジャンケンしようか」「ワン(コラ)」「ん? チンも参加する?」「グルル」

しねえよ。

「この国は本当に大丈夫か？次期王をジャンケンで決めるとか王子が言つていしたものなのかな。親の顔が見てみたい。あ、現王様か。

「最高魔法使える子が生まれないかなー。そしたらその子に継承権譲るのに」

「今は少ないからな。最低、使えなくても魔法書を読めるだけでいいから現れてくれるといいんだが」

魔法書？もしかしてあの図書館の部屋にあった本だろ？えつと確か……ああそうそう、最高魔法全書。

あれれ、読めちゃったんだけど私。え？すごいの？

「せういえば大分扱えるようになつてきたよ。さつきチン助ける時にミシュケルゲに使つてみた」

「あー、最近使つてないな。レイルは風だつたな。……つておい、一步間違えればチンもお陀仏だつたじゃねえか」

「大丈夫、本番に強いから」

「ワン（ウーラ）」

ふー、と同時に溜息を吐く一人。流石双子、息が合つてる。

「まあ……ジユノアはどっちにしても、王は無理か」

「ああ。国民受けが良くないからな」

ジユノちゃんが？優しくて強いんならピッタリじゃないの？

「あれもどうにかしないと、後々響くかもな」

「全く、内面は俺達がキツチリ躰けてあげたから完璧なのになあ」

あなた達が躰けたら良くてはならないんじや……？」

「ジユノちゃん、よくあんな良い子に育ってくれたー知らないケ
ドー！」

しばらく経つと扉がいきなり開いた。

「何の用だ」

「ワン！（ジユノちゃんー）」

「ジユノア久しぶりだね」

「……そうだな。で、何の用だ」

早く訓練に戻りたいのか少しイラ立つているように見えるジユノちゃん。

ジユノちゃんに飛び付いていつて分かつて欲しいような、イケメンの腕から抜けたくないような……。

「動物と会話出来る？」

「……は？」

「いやこの子がさつきから何か言いたげなんだけど、俺達分からなくてね」

レイルはそのままして、ロイスの腕の中にいる私の頭を撫でる。…
…やばいよ嘘だん。イケメンの双子に挟まれてるよ。ぐつはあ。

「そんなことで呼んだのか」

でもジユノちゃんは私の方を一切見ずに、イラ立ちが増した声で告げる。そりや、大事な訓練中にこんな事で呼び出されたら腹が立

つのも分かる。

「ユザ、俺は戻る」

「あ、ジユノア様！」

ジユノちゃんのマントがじゅらりを向いた時、私はレイルの腕の中を翼を広げて勢によく飛び出した。

「ハセ」

「おお、飛んだ」

なんて口イスの間抜けな声が聞こえた。

「ワン！」

私はそのまま振り向いたジユノちゃんの胸に飛び込んだ。
んくんくん。よし大丈夫。汗臭くない！！

訓練途中なのにね！不思議だね！さてか今飛へたね！不思議だね！

「くーん（音乃だよ）」
「この翼

「わおふつ」

「ネノ、か
？」

「え、ネノ？」

「ギャン！ ウォン！（そうだよ！ バカライスめ！）」

「そういえばネノ様の翼と似ていますね

「グワルル！（だからそうだよ！ハゲてしまえ！）」

「何？ ネノつて何？」

「ああ、レイルは知らないか。ジュノアが保護した子がいるんだ。

「でもなんでそんな姿になつてゐるんだ?」

一ヶオノ!

おまえの所為だ！！！……多分！

口イスにグルルル唸つて いると、ジユノちゃんが私の頭を撫でる。

傷つけないよう、優しく……。

仕方ない。ジユノちゃんに免じて唸るのせやめとあげよ。

「サルバイバルは伍長で來し
今田は絶れり、だと」

「早く行ナ」

「せこい……」

何か反論しようとしたゴザは、ジユノちゃんの一睨みで去つて行った。

持つべき友は外見ではなく内面（後書き）

今更思つたんですが幼児化つて、もしかして6歳ぐらいまで戻らな
きやいけない……？
え、どうしよ？……。いや、しょうがない！

本を離す理由は多々あるが多くはアレだ。

「ネノ、何があった？」

「クン……ウワウ！ ギヤン！」

「ジユノア分かるの？ すごいね」

「すごいな」

「…………分からない」

「ウオーン！（分からぬのかよ……）」

ん～、戻らなかつたらどうしよう〜。

「キヤウン！（お嫁に行けない……）」

「大丈夫、俺の所において」

「わふつ」

喜んでつ。

「なんだレイル、言葉分かるのか？」

「時々ね」

乙女の心に敏感だからね。

「…………ネノは獸だったのか？」
「ブホ！？ ウワン！？」

人間だよー。ちょっと怪しい所も変態な所もあるのは認めるナビ、ジユノちゃんよりは人間に近い気がするよー。-

「あ、ジユノア。風呂行って来なよ」

「何故だ」

「汗臭いでしょ？ 女の子は嫌がるんだよ。教えたでしょ？」

「……ああ」

教えたのか。

ジユノちゃんは私を降ろすと違う部屋へ入つて行く。素直に言つ事を聞くらしい。別に臭くなかったんだけどな。臭かつたら自分が離れるし。

降ろされた私はなんとなく寂しくなつてレイルの元へ歩く。

「どうしたの？ 抱っこする？」

「わふ

「ん」

レイルの腕の中で丸くなるとシャワーの音が聞こえた。

「なんでチンはあんな森にいたんだろうね？」

「わふう

チンじゃないよ。

「ああ」「めん。ネノだつたね」

だからなんで分かるんだ。

「城の探検でもして迷ったんじゃないかな?」

「ワン!」

失礼なー。ロイスの所為だよー。

「ンンン

「はーい。なあに?」

ノックする音にレイルが返事をする。

「リニーといふ侍女が面会を希望しています」

リニーですとー??

「リニー?」

「ジユノアの侍女だ。いいだろ、入れろ

「はーい」

ソロソロと扉が開いて、入ってきたリニーは泣きそつて見えた。
走つてこようかと思つたけど、雰囲気的ににくかった。

「あ、堅苦しここといいから、要件どうぞー」

「はい……、あの、ゴザールド様がここにくるとお聞きしたのです
が……」

「ゴザールド? 誰だ?」

「あー、もう帰つてくるんじやないか? もしかしてネノか?
「はい。図書館へ行つてもお姿が見えなくて……」

「はい！」

「わふ！」

「コレでか！ 酷いなレイル！」

「え？」

「よく分からぬいけどこんな姿になつちやつたみたい」

「翼に見覚えあるだろ？」

「そういうれば……、ネノ様の翼です。ネノ様なんですね……良かつた」

そう言ひとりーの瞳から涙が零れる。

「うおふつ」

レイルの腕から飛び出してリニーの周りでオロオロしていくと、レイルが歩いて来て再び抱き上げられる。

「ほら、泣かない泣かない。ケガも無いし、ジユノアもこのことを知つてゐる。いつ戻るかは分からぬけれど問題ないでしょ。君が泣いてるジユノアに怒られそうだ」

「はい、ありがとうございます……。あの、ジユノア様は？」

「ん、風呂」

「あ……」

レイルがシャワーの音のする方を指差すと、リニーが頬を染めた。
……可愛いなリニー！

「ブフフ」

「……大丈夫ネノ？」

「わふ！」

何の問題もないよ！

思わず漏れた声に恥ずかしくなりながら、翼をバサバサさせてその場を取り繕う。いや出来てないけど。

それから少ししてリニーの涙も止まった頃、扉が再びノックされ、こちらが何か言つ前に扉が開く。

「ただ今帰りました……って何泣かしてるんですかー!?」

ゴザは入つて来てリニーの顔を見ると、即座にレイルに焦点を移す。

「え、あ、違うんです！ これは？」

焦るリニーとゴザに対し穏やかに笑つていてるレイル。と、後ろで忍び笑いしてるロイス。そこへ風呂から出て来たジユノちゃんが混じる。

「…………リニー？ 何故泣いている」

「えっと、あの、あのっ……」

もうリニーはパニック状態みたいだった。再び瞳に涙が溜まりかけていく。……可哀想になってきた。

「レイル……」

低いジユノちゃんの声。

「俺？」
ロイスだよ」

ジユノちゃんの鋭い視線がロイスへ移る。

「へへ、まことに、おまかせください」

「そうだね。あのね、ネノが無事つて知つて安心して泣いちゃつた

「そうなのか?」

心なしか優しい声色で尋ねるジユノちゃん。

「第一〇、無」

「いしゃ」

おお、木の様を探していいのか？」

「なるほど。『めん伝えるのが遅かつたね』

「ゴザねえさつまつたーにへひ三三一の頭を撫でた。」
つて、

「ブホッ！？」

卷之三

ユーザールドつてユーザ！？

一サじやなかーたのか!!

「アーティストの死」

「わづふう」

いやなんでもない。よく考えれば別にユザの名前がなんだりうと
関係なかつた。

そんな思いを込めた言葉は、

「ユザに冷たいんだね」

きつちりレイルに伝わつたらし。

あ、ユザの顔が引き攣つてゐる。また厄介者が増えたとか考えてや
うな顔だ。

「おい、立つてないで座るぞ」

「ああそりだね」

「来い」

リニーに向けてジユノちゃんが囁く。

「失礼します……」

恐縮しながらリニーがジユノちゃんの隣へ座る。私はレイルの腕
を抜け出しリニーへ擦り寄つた。

ホントはね、ホントはだよ？リニーもいいんだけど、イケメンズ
の腕の中がいいんだよ？

でもね、リニーが可哀想じゃないかー男達に囲まれて、位が上の
人達ばかりで。

「ネノ様」

「わふ」

「ありがとうございます」

「……わふ」

分かつたらしい。……」これはこれで照れるものがある。

「で、いつ戻りそうなんだ?」

「えつ俺ですか!? 知りませんよ! レイル様分からないんですか?」

ジユノちゃんに聞かれたゴザは焦つたよつて聞き返す。

「うーん、人間から動物になつたなんて俺も初めて聞いたしなあ。
なんか変な物でも食べたんじゃない?」

「ワン! ウワン!!」

そう、そうなんだよ……飴だよ……

「なんだ拾い食いか?」

「ウオウ……!」

おまえだよ……!

「……ロイスの所為なの?」

「キヤウン!!」

「そうみたいだよ?」

「俺か?」

「俺か?」

「あ、アレじゃないですか? あのお菓子」

「あ

「グワーン!!」

「あ、じゃねえよ! 「あ」じゃ……!」

「ロイス、何をした

「いや何をしたというか、そこらへんの婆さんから菓子を貰つたんだ。で、それをネノに……。そつか、そんな作用があつたのか」

「そこらへんの婆さんってなんだ。どこらへんだ。すうい怪しいぞ。王子がそんな簡単に物貰つていいのか。

「よしユザ。今日中に婆さん探し当てる、あの菓子について聞いて来い」

「俺ですか！？」

「そうだ。がんばれよ」

「ああもうっ、はあ……。では行つて来ます」

大変だなユザ。

「わふ」

でも私の為にがんばれよ。

「さて、戻るまで誰かの部屋で飼つ？」

「わふう」

飼つてか。いや犬だけじや。

「と/or>うか、俺の部屋に来る？」

それはそれはキラキラのスマイルで誘つてくれましたよレイルさん。そりや断るわけないでしょ？

「ダメだ」

「グル！」

何故！

それはもう高速でジユノちゃんを振り返った。

「危険だ。俺の部屋でいい。大体戻つて来ない日があるだろ」

ああ、女の所ね。

まあ顔だけでいったらジユノちゃんが一番危険だけどね。

「危険つて失礼な。俺は女子には紳士だよ？」

「あ、俺もな」

ロイスはテーブルの上のお菓子をつまみながら言つ。

「ロイスは普段猫被つてるでしょ」

「その時は紳士に変わりない」

やつぱりロイスは使い分けてるのか。

どうりで最初の印象と今が違うわけだ。

「とにかくネロはここにいたらしい。いいな？」

「わふ」

つて、じる？

じるはジユノちゃんの部屋なの？あ、だからリカちゃん……

「ウワウー！」

そうだりカちゃん！そつかそつか、ジユノちゃんの部屋なのか！

そりゃエロ本もないはずだ！！

「夜は俺の部屋にいる。あとまリーラーを連れて行けば、城の中なら自由にしのう」

「ワン

「いい子だ」

リーラーの膝の上に座っている私を、ジュノちゃんは撫でる。

「ジュノアに動物飼わせるつていいかもしねない」

「アニマルセラピーか?」

「うん」

「別にアイツ必要なくないか?」

「そろかな」

「ジュノアが愛くるしい動物を愛でてるつてのも和むといえれば和むが。ちょっと笑えるぞ」

「まあね」

なんて会話が内緒で交わされていたなんてことは、私達は知らない。

本を纏す理田さあやあるがあくはアレだ。（後書き）

「」の小説に出て来る魔法の詠唱は、その時テキトーに考えたものなので意味とか追求しないでやつてください
全ては響きです！――

あ、あと各話のタイトルも思い付きました。話にひまつとでも掠つていたら許してあげてください。今回はHOROHOHO（
他に思いつかなかつたんです！　「」めんなさい――！――

記録と規則は破る為にある

ワンコロ生活3日目。今日も隣には動物好きのレイル。なぜかレイルと意思疎通が若干出来るようになった。

「わふ（それちょーだい）」
「ん、これ？　いいよ」

貰つたのはレイルが食べていたおやつ。ボーロみたいで食べやすい。

「ネノ、あーん」
「わーん」

受け渡し方は可愛いがバリボリ音を立てながら食べる私はあまり可愛くないだろう。
でもしあうがない。だつてレイルが一気に5個も放りこむんだもん。

「つ、ごふ」

ぐえ、変なとこ入つた。

「大丈夫？」
「……きやう（なんとか）」

「よしよし。はーミルク」

「きやん（水がいい）」

「はー水」

「ゴックゴック。」

「ゲフ」

「ん、治まつたね」

「わふ」

ふわつふわのソファにレイルと座る私。それを見守るコニー。ヒュザ。

「わふう」

早く元の姿に戻りたいなあ。

レイルに可愛がられてる状況もおいしけどね。

「俺はもひちよつといのままでもいいよ？ 可愛いくて仕方ない」

「グルル」

でもトイレ不便なんだよ 知ってる？

部屋の中と、人間のトイレと同じ場所の一いつに設置してあるけど、
部屋の中でするならみんないるし、

トイレ行くにもレイルに言わなきゃ行けないし、どっちもちょっと抵抗がある。

「でもそつだね……戻ったネノも見てみたいね。天使みたいなんだ

る「づ~」

「わづふ（そりゃもう）」

今だけね。数年後にはアレだけだ。

「そろそろ効果が切れる頃だよね

「クン」

今日か明日くらいだろ？

あの日、ロイスに命じられてお婆さんを捜しに行つたユザは、命令通り日を越す前に戻つて来た。お婆さんをおんぶして、息を切らしながらも時間通り帰つて来たユザが、いつもより少しカツカツ良く見えたのは内緒だ。

ユザが何故お婆さんを連れて來たのかよく分からないが、あの飴は色々な効果があるらしく、今回は、獣化、だつたらしい。大体1日～5日の効力で死に至るようなものはないとも言つていた気がするけど、夜遅かつたからあまり覚えてないのが正直な所。ま、大丈夫だろう。

だが心配なのは説明を聞いていたロイスが、私を見ながら王子様フェイスで不自然にニヤニヤ……いや、ニコニコしていた点か。

また食べさせられそうな危険を感じた。

ジュノちゃんは腕組みを解かないまま、目を閉じて説明を聞いていた。え、実は寝てたとかないよね？

その後はジュノちゃんの、もふもふベッドで眠りについた。

「クン？」

「ロイス？」

「わふ」

「ロイスは女の所かな。あいつは自由人で女好きだからね」

「レイル様もですけどね」

「何か言つたかいゴザ?」

「いいえ」

口を挟んできたゴザに笑顔で返すレイル。
レイルは基本、爽やかな笑顔を振りまいているが裏が猛烈にあり
そうだ。常に笑顔の人が怖いって言つじやん?

「さて、今日は何処に行こうか」

ふむ……。

「城から出よつか」

「わふ!」

「え、ダメですよ! 今日こそは書類片付けてください!」

「ゴザは来たくなかつたら来なくていいよ。さあネ、リニー行こ
う」

「ちゅちゅちゅ……あああもつつ。分かりましたよー!」

いつもゴザは止めに入るが結局負ける。

「ですが暁までですよ!」

「分かつた分かつた」

てつきり変装でもして行くのかと思つたら、特に顔も隠さないままゴザとリニーだけ引き連れて街へ降りるレイル。
護衛つていっぱい連れてくのかと思ってたんだけどな。

「ふんふん?」

「ん？」

「ふおん？」

「……ごめん、分かんないや」

「わふ」

伝わらなかつた。女関係はすぐ伝わるんだけど、護衛の疑問は伝わらなかつたらしい。

「何か食べようか」

「わふ」

市場みたいに賑つている所に入ると、レイルに気付いた人達が一気に騒ぎ始める。

元から賑つていた市場がさらにざわめく。

「金髪……レイル様よ！！」

「あ、こっちを向かれたわ！　レイル様――！」

「今日はロイス様はいらっしゃらないのね？」

「でもユザールド様がいるわ！」

いたるところで上がる黄色い歓声。ずいぶんと人気らしい。驚いたのはユザも相当人気があるということ。

「クンクン？」

「ユザは黒騎士団団長だからね。有名だよ」

「ブホ！？」

「なんですかその失礼な視線は……」

別に疑つてる視線なんて送つてないよ！
ただちょっと、ホントかなー？っていう視線だよーー！

「フイリール家は代々仕えてるんだ。だからゴザも小さい頃から俺達の後ろを着いて来てたんだよ」

「クン?」

「ああフイリールっていっのは、ゴザの名字。小さい頃は可愛かつたのに、今となつては口うるさくなつちやつて」

「あなた達がサボるからでしょ! おかげで物心着いた時から苦労してんんですよ!」

「じ! 苦労様ー。あ、おねーさん、それくれる? いくじゅ?」

ゴザを適当にかわすと、果物を売っている女人に声をかける。女のは顔を真つ赤にして手を胸の前でぶんぶん振る。

「だだだ代金なんて滅相もござりません!! ビ! ブ! ハ!!」

「そう? ありがと」

美味しそうな桃をもらつたレイルは、礼を言つと桃をゴザに渡す。

「ネノが食べれるくらいにね」

「分かりました」

再び渡されたそれは、一口サイズに切られていた。

「わふう」

「すごいかい?」

「わふ!」

「ほらあーん

「わーん」

んんん美味しい!

「わふつ」

「良かつたね。リニーも食べなよ」

「えええ！？ そんなっ」

「わん！」

「ね？ 君の主人もそう言つてるし」

「主人？……私が！！」

「そ、それでは、失礼します」

パクッと口に含むリニー。

「クン？」

「はい、美味しいです」

「わふう」

「もつと食べる？」

「わふ」

口を開けると放り込まれる桃。うん、美味しい。

「あれ、俺はないんですか？」

「ないよ」

一人貰えないユザは、分かつてましたけど……、と呟く。

その後も食べ歩きをしながら市場を回る。
昼に近くなつた頃、ユザが切り出す。

「そろそろ戻りましょうか」

「えー」

「約束したでしょ」

「グル」

「硬い」と言つなよ。今日もつひよつと遊んでから元気だ
「あのね、レイル様とロイス様は毎日十分遊んでるでしょ」
「足りない」

流石双子。言つことがロイスと一緒にだ。

「さ、帰りましよう」

「ネノもまだ帰りたくないよね?」

「わふ!」

「ほり」

「ダメですよ! 何のための約束ですか

レイルにコザの隣へ行くよつて、レイルの腕の中からコザ
に前足を伸ばし、ポンと手を置く。

「わん……、わふう、グル!」

ふつ……。良い事言つた。

「いやあの、全然分からないんですけど
「ガル! (しまつた!)」

自分ではす"い決まったと思つてたのに……

「記録と規則は破る為にある、って。いいねソレ。今度使おう」「使わないでください! ビーの悪知恵ですか!」「わふわふ」

学校で誰かが叫んでた気がする。

「さて、どこに食べに行く？ 何食べたい？」

「わん！」

そりゃあ肉でしょう…！

「了解」

結局折れるしかないユザは、溜息を吐きながら着いて来る。

「嫌だつた帰つてもいいよ？」

「そんな危ないこと出来ないです」

「大丈夫だよ、この頃平和だし」

「そつちの心配じやなくて、女性を何人も連れ帰りそうで怖いんです。もしくは突然失踪しそうで」

「ネノがいるからそんなことしないさ。先約のレディがいるのに失礼だらう？」

「……そうですね」

うむ。日々苦労してそうなユザだつた。いや苦労してるのか。
そこに私も加わったんだから、それはもう厄介だろ？。自分で言うのもあれだけだね。

「わふ」

がんばれユザ

「他人事ですね……」

「わふ

他人事だもん。

小さな発見は得した気分になるよね

超高級料理店にでも行くのかと思つたら、着いたのは市場の近くにある、夫婦が経営する小さな料理店だった。

もちろん犬のご飯なんてものは置いてなかつたが、城でも人間食を食べているわけで、そこでもレイルに食べさせてもらいながらハンバーグを平らげた。

チーズがかかって美味しかった、うん満足。

カララン、といつ鈴の音を立てて店を出ると、再びレイルとコザの攻防が始まる。

「さあ帰りましょ」

「そう言つなよ。食べた後は運動しないと」

「どういった運動をするつもりですか」

ジト田のコザ。

「ん？ 公園が近くにあるし、そりゃボール遊びでしょ」

そんな庶民的な遊びをレイルがするのか。似合わないぞ。という

かボール持ってるのか？

「城の庭で遊んだらしいじゃないですか。ここでそんなことしたら大変なのは分かるでしょう」

「大変なのはユザだけで、俺は別に遊んで楽しんでるだけだから大変じゃない」

「……分かりました。言い方を変えます。俺が大変なので城の庭で遊んでください」

「イヤ」

緩やかな笑顔で、切れ味抜群の刃を瞬時に繰り出すレイル。ユザの顔が引き攣つっている。

「さて行こうか」

「あ…………」

ユザの戦意喪失により、レイルの勝利になつたらしい。まあ、最初から分かつていたことだろつ。

市場から少し坂を下りると広々とした公園があった。

「わふう」

日本の公園と同じだ。滑り台やブランコがある。

公園は、遊具がある側と、芝生だけが広がる側に分かれているようだった。

「遊ぼうか

「わふ」

芝生に降ろされた私はレイルを見上げる。すると、いつの間にやらレイルの手には小さなボールが握られていた。

「取つておいで

「グルルル」

ええええ。リカちゃん人形の次はボールですか。私は何歳だ。いや、その前に人間だよな？あ、今犬か。

「ほり行くよ？」

「ギャウー」

運動はキレイじゃないけど、そんな本格的な犬の遊びは

「ワンッ！」

面白かった。

ダメだ。ボールを投げられると反射的に体が動く！ 犬か！コレが犬なのか！！

翼をバタバタさせながらボールが投げられるのを待つ。

「ワンワンー！」

最初はブーブー行っていた私だが、今は夢中で追いかけていた。尻尾が止まらないのがわかる。

遠くに投げられたボールをくわえて戻つてみると、子ビも達が集まっていた。

「ユザールド様！ 剣を教えてください……！」

「ぼくも！…」

「わたしも！…」

「ずるい！ ボクも！…」

なんだか大人気らしいユザ。

お母様方がレイルに群がり、子どもがユザに群がるという図が出来上がつていた。

ユザとがどうでもいいけど……

「ガルルル（早くボール投げて欲しいんだけ）」

ポツーン、と一人（いや一匹？）ボールをくわえたまま4つ脚で佇む私。翼がショゲてきちゃつたよ。

そこへリニーが駆け寄つて私の前でしゃがむ。

「わふ（良い所に来た。投げて）」

「えつと、お休みになられませんか？」

「わふふ（投げて）」

「ユザールド様とレイル様はもう少しかかるかと思いますし……」

「ガル、ワン！（そつちはどうでもいいよ、投げて！）」

どうも伝わってないようなので、ボールをリニーの手に押し付ける。

「投げる、のですか？」

「わふつ」

「疲れていませんか？」

「わふ」

「分かりました……」

「ワン！」

よつしゃ来い！力一杯投げてね！！

「行きますよ！」

「ワンワンーー！」

「たあつー！」

「うワウーーーー？」

「きやあー！」

可愛らしい掛け声と共に投げられたボールは、逞しい速さで盛大に飛んでいった。

力はあると思っていたけど、ここまで秘めていたのか。いやいや、今は取りに行かないと。

「ネノ様！」

「ワン！（大丈夫！）」

だだだだだー、と走って行ってパクリとくわえるとまたリニー達の元へ走って行く。

しかしリニーの姿が見えたあたりで、突然体に異変を感じた。

「ギャウーー（これはーー）」

一瞬意識が遠のくと、次の瞬間には田線が上がっていた。

「戻つたああああ！」

「ネノ様！！」

ガツツポーズと共に空に吼えた私。

……ん？ちょっと待てよ？

服つて……

「着てる！」

「何がです？」

「あああ何でもない！」「うちの話！」

駆け寄つて來たリ一一が不思議そうに私を見る。

そりやね、戻つたら裸でした、とか笑えないからね。 そうだよね、
アニメでもズボンは絶対なくならないしね！

「へえ、これが噂の天使か。確かにロイスが気に入るのもわかるね」

いつの間にやらレイルと愉快な仲間達（ユザ含む）が、私の周りに群がつていた。

来るなら子どもと奥様方を置いてきて欲しかつた。

これだけ囮まれると氣の弱い（ウソ）私は落ち着かない。 レイル
達は慣れているのか気にしてないみたいだけど、ダメだ！！

「レイル、ネノ帰る……」

弱弱しく、か弱い子どもを演じてみた。

「帰りたいの？」

「うん」

「じゃあ帰らうか」

レイルは優しく微笑むと、スッと両手を差し出してきた。その手に誘われるようになつてレイルに近づくと、ふわりと抱き上げられる。
……うくく、最高。やっぱいいね、イケメンは！ テンション上がるね！…

おつと危ない、顔が一ヤける所だつた。あ、すでにニヤニヤしてたかもしない。前方に見える少年が怪訝な顔をしている。
レイルの首にギュウと抱きつくと、甘い香りが広がる。こんなとこもロイスと似てる。ジュノちゃんは爽やか系だけ。

「じゃあみんな。またね」

そう言つと、レイルは歩き出す。

後ろから着いてくるコニーとゴザを見ていたけど、段々眠くなつてきた。

「ネノ？ 眠いなら寝な」

ポンポンと背中を叩かれると、いよいよ眠気のピークが訪れる。

ガンガンギンギン響く音。
何?せつかく心地いいのに……。

「ん……」

重い扉を開けてみると、人と人どが剣をぶつけあつていた。

「……ええ!?」「あ、ネノ。起きちゃつた?」「レイル……」「ごめんな、うるせかつたかな。」レは訓練場だよ。……おーいジユノア!…」

レイルは私を抱き上げると、兵士達に近づいて行く。
稽古をつけていたジユノちゃんは、剣を出したままレを向く。

「ああ起きたのか。ネノ、体に違和感はないか?」

チラりと、視線が剣へ動く。本物だよ。びっくりだよ。間近ではぶつかり合つ音が鳴り響く。

「おい!…」「つうえ!?」

あ、私じゃないのか。どうやら兵士達に向けた声だつたらしいが、いきなり大声を出すから変な声が出てしまつた。恥ずかしい。

「剣を下げる!…」

訓練中の兵士達は驚いたよ／＼一斉にジユノヘリヤーを見た。

「聞こえないか……」

しかし再び、剣を納めたジユノちゃんの声が響くと、皆懇意に剣を仕舞つた。

「全員魔術へ入れ……」

「はっ」「」

ジユノちゃんの声に応える兵士達。
何故かレイルは笑っている。

「それでネノ、異常はないか？」

「あ、うん！　ないよ……」

ジユノちゃんの質問に、今度はひやんと答えると、ぴょんと抱き付く。

「ジユノちゃん……戻ったよ……」

ふと蘇った嬉しさに翼を広げて飛ぶと、兵士がわっさとは比べ物にならない驚き顔で、一斉にじり歩きを向いた。コザハ額に手を当てるし、レイルに至つては爆笑している。

……あれ、なんか変なこと言つた？

気分はプリンセス

どうしたんだろうか。みんな驚きの表情から恐怖の表情へ変わつていいく気がするんだけども。

段々張り詰めていく空氣を気にせずジユノちゃんが私は抱き直す。うん、ベストフィット。

「良かつたな」

一言一言つづり、さつきまで剣を持っていた手で私の頭を撫でる。レイルもロイスもジユノちゃんもよく撫でるなあ。いいんだけどね。

また兵士達を見ると、今度は呆氣に取られた表情に変わつていた。みなさん表情豊かだね。揃つてゐし。流石兵士。

「今日はどこに行つたんだ？」

ジユノちゃんが聞いてくると、しゃべれるよくなつた喜びを思ひ出して翼が目一杯開いたのがわかつた。

「あのねジユノちゃん！ 音乃ね、レイルとボール遊びしたの！ でねえレイルに入いっぱい寄つてきて音乃ポツーンだったの！ でもねリーネーが来てボール投げてくれたの！ そしたらね！ とおーくまで飛んでつたのぉー！」

ナビもひじにテンションで弾けてみた。翼もバサバサ弾けてみた。
完璧だ。どうだジユノちゃん。

「せうか」

良くも悪くもクールだぜジユノちゃん!!

あれだけ熱く語ったのに「せうか」だと…? …ん?でも心な
しか皿が据わっている。視線の先にはレイル。

「ははっ、悪かったよジユノア。ネノを放つておいたわけじゃない
よ。気配はずつと迫つてたわ」

超イケメン王子は、フワフワの金髪を揺りしながらハハハハ笑
てくる。

やついえばわざとレイルを呼び捨てにしたけど良かつただらうか。
まあ問題ないか。レイルは気にしないだらう。

「護衛は付けたのか

「コザを連れて行つた。

ああ、言いたいことは分かつてゐる。だがぞんざいと連れて歩く
のは好きじやないんだ。まあね、中へ入るつか

話題を変えるよつてレイルが手を伸ばしてくる。

ジユノちゃんが無言で私を差し出すと、今度はレイルの腕の中こ
納まつた。

「ジユノちゃんまた来てもいい?」

「……ああ」

少し間はあつたが気にしない！ 案外臭くなかったし暇だつたら
また来よ。

ジユノちゃんの部屋へ戻ると、毎日の口課のよつこくつぶぎ始め
る。

何故かジユノちゃんの部屋が溜まり場らしい。いつの間にか帰つ
ていたロイスもお茶を飲みながら私の熱弁を聞いている。

何を王子一人ひとりともう一人に熱弁してゐるかつて？それは……

「でね！ 音乃是ね！ ピンチになるとヒミツの力が解放されるの！」

私の中二病の設定である。

「悪い人が襲つてきても、ドラゴンが現れて音乃を守るの！ 音乃の
家来だよ！」

「王子様が現れるんじゃないのか？」

バリバリとお菓子を食べながら、氣だるそうに聞いてくるロイス。
そんなロイスとは対照的に熱くなる私はソファに立つて翼を広げ
ながら力説した。

「違うよ！ 王子様はもっと後だよ！ 全部使い果たして、もうダメっ
てなつた時に現れるの！ ……待らせたな、って！ ……キヤー！」

「王子様なのに、待たせたなつて言つの？」

ふーん、と興味無さそうに呟くロイスとは違い、レイルは相変わらずの笑みで話を聞いてくれていた。

「カツコイイ王子様なの！！」

「じゃあ、ネノが危なくなつたらそつ言つて現れるよ」

「ぐはあつー！」

甘い笑顔でサラリと放たれる言葉はものすごい威力だった。
思わず顔を赤くしたら、ロイスがこちらをチラ見して喉で笑つた。
くつ……流し目も中々の威力だぜ。この一人といたら寿命が縮まりそうだ。

「ネノの秘密の力はなんなの？」

「それはね！」

言おうとしたがやつぱりやめた。

「……今度教えてあげるー！」

「今は教えてくれないの？」

「うんー！」

ヤバイ。楽しい。イケメンが優しく相手してくれるって最高だ。
レイルは聞き上手だし口イスもなんだかんだで聞いてくれてるし、
視界の端では聖母みたいに柔らかく微笑むリニーが見える。
視界に入ってるけど意識には入らない人もいるけど。（ゴザ）

「教えてくれるのを楽しみしてるよ。あそろそろ座りな。こっちへおいで」

「うんー。」

レイルに手招かれて、隣へちょこっと座る。

「よくしゃべつたから疲れただろう? 何か飲む?」「飲むー。」

一旦落ち着いたら急に喉が渴いてきた。
確かによくしゃべつた。どれくらいかって、えーと体内計算で1時間半ぐらいい。会ってるかは知らない。
レイルからミルクを受け取ると一気に飲み干した。

「ふはーー。」

「上手かつたか?」

「うんー。」

ロイスが頬杖を付きながら聞いてくる。
私の答えを聞いて、良かつたな と微笑した。

ロイスってレイルとは違つ不思議さがある気がする。……んまいつかーー! ー!

「ロイスも飲む?」

「俺は「コーヒー。//ルクはお子ちゃんの飲むもんだ」

むむむつ。

「子どもじゃないもんー。」

ソファから降りて鼻息を荒くしながら言こ返す。

「へへ、やうだな。じゃあ俺はいいからユザ!!ルクやれ」

「ユザはやだよー。」

「なんでだ?」

「なんで?」

「……超イケメンじゃないからーー!」

ユザが溜息を吐いたのが聞こえた。

「なんで俺つて報われないんでしょう。苦労してるのに……」

「人生つてそんなもんだよー!」

「小ちやいのに分かつてんじゃねえか

「ネノ小さくないよ!」

「やうだつたな。悪かつた」

そう言つてロイスはお菓子を差し出してきた。

しつかりお菓子を掴むと、再びソファに座つて口に頬張る。

ガチャリといつ音がすると、扉が開いてジュノちゃんが入つてきた。

「おかえりーー。」

「ああ」

口の中に詰めたままジュノちゃんに飛び付く。上に手を伸ばすと、要求通り抱き上げられた。

「疲れた？ ネノ重い？」

「いや大丈夫だ」

ジユノちゃんが少し微笑んだ、気がする。ジユノちゃんつて基本無表情なんだと思ってたけど、小さく変化しているらしい。今度じっくり観察しよう。

私をレイルの隣に降ろすと、ジユノちゃんは向かいのロイスがいるソファに座った。

「あの後どうしたんだい？」

レイルがジユノちゃんに聞く。

「魔術に切り替えた」

「そうじゃないよ。色々聞かれたんだろう？」

「……ああ。保護していると言つておいた」

「そうか。みんな驚いてたね。特に名前に」

レイルがそう言つと、勘付いたらしくロイスが口を挟む。

「なんだ、見せに行つたのか？」

「見せに行つたわけじゃないよ。少し用事があつたからついでにね」

「レイルも聞いたのは初めてだつたよな。驚いただろ」

「ああ笑つたよ。まさかジユノアを、ちゃんと付けで呼ぶ子が出てくるなんて。ロイスが言つていた意味が分かつたよ」

なるほど、私が！

「ジユノちゃんって呼んじゃダメなの？」

「ん？　だめじゃないよ。ジユノアが良いつて聞いのなら」

笑いを堪えているレイルとロイスはジユノちゃんを見る。私もジユノちゃんを見ると、ジユノちゃんの視線が外へ動いた。

「……別にいい」

その瞬間堪えられなくなつたらしい一人が同時に吹き出す。ついでにユザの咳払いも聞こえた。

ジユノちゃんの目が鋭くなつた気がした。

よく分からぬが楽しそうでなによりだ。

気分はプリンセス（後書き）

仕事で疲れてくると私の中一病が発動しそうになります
目の保養が欲しい今日この頃。

また新連載を始めちゃいそ�で困っちゃってる今日この頃。

駄々はこねるモノ

体が無事に戻った翌朝（いや戻ったけど、戻ってはないんだけどね？）、珍しく三兄弟がジユノちゃんの部屋に揃っていた。しかも正装。

「ぐふつ」

鼻血出るぐらい双子様がカツコイイのはどつしたらいいだろ。そして弟様が熟練の護衛兵に見えてしまつのはどつしたらいいだろ。

ついでにオマケ（ゴザ）すらもカツコ良く見えてしまつのはどつゅう」とだらり。

「……大丈夫？」

「なんでもないです。大丈夫ですハイ」

「そつ……」

すゞーく心配そうな顔で見てきたレイル。

「今日は何があるの？」

「ああ。父上と母上に会つのか。といつか、ネノを披露しに行くんだけどね」

「えー？」

ええええ？

「私？」

「そう。母上が見せらつたつむさいんだ。悪いけど会つてくれる？」

いやいや、会つてくれる？って、拒否権ないんですねー…？

いいけどね！だって超イケメン王子のお父様でしょ！つていうことは絶対カッコイイ…！

そこらへんのオッサン臭いのとは違つて、高級感溢れるオジサマなハズ！

「ふふふ……」

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫！」

何の問題もないよ！

あ、でもちょっと緊張してきた。

「あー……」

ん？ 気の抜けた声の方を向くと、そこには王子様フェイスでヤル氣が皆無のロイス。

「行きたくなえ」

真面目な顔でしみじみと呴かれた言葉が、どれほど行きたくないかを示していた。

「それは俺もだよ。まあ一番はジュノアだらうけどね。ね、ジュノ

ア?」

え、ジユノちゃん?

「……ああ」

私が見ると視線を逸らされてしまった。

「……急用、思い出した」

いきなり棒読みでしゃべり出したジユノちゃん。

「だから行けない。夜には帰る」

そう言つて早足で出て行く。さすがジユノちゃんをガツチリと止めたのはゴザだった。

「許しませんよジユノア様」

ジユノちゃんの無言の強烈な睨みにも、今日のゴザは負けなかつた。

「離せ」

「だ・め・で・す! ちゃんと出でてください!」

「……いやだ」

小さな声だつたが、確かに聞こえた。「いやだ」だって。ジユノちゃんが駄々こねてる!?

「まつたく、こつもこつも苦労させないでください!...」

「仕方がないよゴザ。ジユノアの唯一の天敵なんだから

天敵？

その意味は、お母様にお会いした瞬間に分かつた。

私も服装を整えて、ゴザを先頭にレイル、ロイス、ジユノちゃんの後に続く。

扉が開き、中へ進んで行くと勢い良く駆けてきた美女。まさにレイルとロイスの母親という顔だ。この女性が王妃だろう。
しかしその女性は双子の美形に田もくれず、真っ先に抱きついたのが……

「あんらあ、わたくしのジユノア！　また可愛くなつてえ」「……」

ジユノちゃんだった。

流石の私も固まつた。

可愛い……？ 可愛いってなんだっけ？

チンパンジーまでが可愛くてゴリラとオラウータンはアウトだと思つてたんだけど、ここでは違つただろうか。

「ネノ行くよ」

「えつ、あ、うん」

レイルに肩を抱き寄せられて前に促される。
相変わらず、美女は野じゅ……ゴホンッ。失礼、ジユノちゃんに抱きついたままだ。

前を行くロイスがある場所で立ち止まる。視線を動かすと、豪華な椅子が見えた。玉座だ。
レイルに促されるままロイスの隣へ立ち止まる。
ドクリドクリと胸が高鳴る。

きっと、王様は素晴らしいオジサマフェイスだろう。

足元から視線をゆっくりと上げる。

「ぎゅえっ」

……私から発せられた、不思議な声の響きに4人の間に暫しの沈黙が落ちる。

あれだ。王様があまりにも期待ハズレ過ぎて「げつ」って言つてしまいそうなのを咄嗟に我慢したら、ああいう響きになつたんだ。仕方ない。私は悪くない。王様の顔が悪い。

「……この娘がネノか。異世界の者だと聞いているが？」

短いけれど重い沈黙を破ったのは王様だった。

「はい。ですが、危害を加えることはあります？」

「ううう。むしろ加えられてるような気がする。

「ふむ。ここでは落ち着かんだろう。奥へ」

そう言つてジユノちゃんとお母様を置いて、4人で玉座の後ろにある扉を進む。

「ほー。綺麗な翼だな」

一つのテーブルを4人で囲み、正面の王様が私の翼を見ながら言う。

「広げられるか？」

「クツと頷くと、横のロイスに当たらないよつつかさりと広げる。

「ふむふむ」

なんて言いながら腕を伸ばして触ひつとするから、思わずバサリと閉じた。

「……」

超イケメン以外は触らせないよ……

「……まあ、いい。それでだ、どちらが王になるんだ？」

「レイル」「ロイス」

王が聞いた瞬間、それはもつ息ピッタリにお互いがお互いの名前を呼んだ。

「おまえらなあ、そろそろ決める」

「俺はならない」

「俺も嫌だよ」

王様とロイスはうんざりした顔で話を進める。レイルはいつも笑顔だ。

恐らく、ロイスが嫌がっていたのはこの時間だろ？。ジユノちゃんが嫌がっていたのはお母様？

「ジユノアに任せたらいいだろ」

「アイツは国^{くに}の砦だ。二つは流石に重いだろ？」

「大丈夫だよジユノアなら。国^{くに}が危なくなつたら俺達も参戦するし」

「どこに王子三人が揃つて戦争に赴く國^{くに}がある？」

「ラニッシュ国^{くに}」

「はあ……。お前達とは話がしたくない。この時間が憂鬱だ」

「俺も」

三人が話をしている最中私はずっと王様の顔を見ていた。

だつて余りにも残念過ぎるんだもん。しかしへジユノちゃんは誰似なんだろうか？突然変異？

母親は超美人、父親は超平凡。冠^{くわん}がなかつたらそちらへんのサラリーマンと区別がつかないぐらい。

腕を組んで首をかしげていたら王様と目が合つた。

「さつきから見ているが、私の顔に何かついているか？」

「いえ」
「普通の顔が」

「……」
「……」

しまつた！！
つい本心がチラリ。

「…………と、特に特別な意味はないデス」

「……そうか。別に聞いていないが」

なんか墓穴掘った！？

「中々珍しいのを拾つたな」

「そりやジユノアを手懐けるくらいだからな」

手懐ける？

「なるほど」

「あ、こういうのビックリ？」

何か閃いた顔のレイル。

「ネノを神の子に仕立てて女王にする。護衛はジユノア」

「よしそれで行こう」

すぐさま賛成したのは勿論ロイス。

「何をほざいてる。最高魔法が使えば最終案として考えるが、読

めもしないであります。これは到底無理だ

最高魔法……

「それって図書館の奥の部屋にあつた本のこと？」

そう言つたら、二人が一齊に見た。

「読めるのか？」

「え、はい」

「その前に、部屋に入れたのか？」

「うん」

「いつだ？」

「ロイスに飴貰つた次の日。あの部屋の窓を覗いてたら落ちた

「ああ、だから森に居たの」

「うん」

「……父上、この子は本当に神子かもしけない」

なんと、神の子説浮上みたいですね。

中一病にも色々ある

「……レイル、私は騙されないぞ？」

何が？

「バレました？」

「当たり前だ。何年お前達の父親をやつしと悪いんだ。その子は神の子でもないし、次期王を押し付けようといつのもバレバレだ」

「ほお……。

「バレたら仕方ない。でも本当にあの本を読めるのはすごいよ」

「ああ。すごいというか、おかしいというか……」

「音乃おかしいの？」

「いやネノはかわいいよ。少し変わってるけどね」

ナイスフォローだレイル。

「今度魔法を使わせてみる。もしかすると、もしかするかもしけない」
「ええ」

「もし使えたなら……、本当に王にしようか」「ロイス。まだ言つてるのか」

呆れ顔の王様。

「レイルも思つてんだろ?」

「ふふ」

「バカ息子どもが……」

「いいじやねえか。俺達は女のために生きてんだ。国民のためじやない」

「つむ。キリッとした顔で言い切つたよロイス。」

「ネノを神の子じやなくて妹にしようか。それなら魔法を使えても自然だ」

「そうだな。翼は神のお告げか、良いよつに噂を広めればいい」

「ちょっと待て。なんでお前達は勝手に話を進めているんだ」

「王になるのが嫌だから」

「うむ。パパは大変だ。」

「…………」の話は今日は終わりだ。そろそろジユノアを助けてやれ

「放つておいたってそのうち来るだろ」

ロイスの言つた通り数分後、珍しく必死の形相のジユノアちゃんが左腕にお母様を纏わりつかせて入ってきた。

「あら、わたくししたことが余りの感動に聞くのを忘れてたわ! ジュノア! 怪我はないの? お腹痛くない? アザは? ご飯

はちゃんと食べてる?
いじめられてない?」
夜に寂しくて泣いてない?
お兄ちゃんに

お、おひおひ。これほジユノせやんじやなくとも1歩2歩140歩ぐにでこひき。おひおひ。落ち着いてお母様。

「... ダイジヨウブデス」

すぐ困ったようにカタコトで答えるジユノちゃん。

「そりゃ、ホントにアカン？ 何か困ったことがあつたらすべやく話題

「ハイ」

お母様、ジユノちゃんはきっとあなた様が一番の悩みの種だと思います。

۱۰۷

そこでこちらを見てなにか気づいた様子のお母様。

「あら。あらあらあらー！ この方！？ この方なのね！？」

もしかしても私を指してる？ え、もしかして「よくもわたくしのジュノアを！」とか言われちゃう？ 違うんですよ母様、私は無実です。

「まあ可愛い！ ジュノアにも負けないわ！！ お名前は？あ！ ネ
ノさんって言つたかしらね？ ね？ そう？」

「は、はい」

がしつと手を握られて近距離で、興味津々のキラキラした大きな瞳が私を映す。そこに映った私は猛獸に食べられそうなか弱い獣に見えた。

「そうよね！　ああなんて可愛いんでしょー！　一度お会いしたかつたのよ！」

「ワタ、ワタチモテス」

興奮しきつたお母様を前にして、ジユノちゃんのようにカタコトになる私。しかも噛んで私がワタチになつたがお母様は全く気にならない。いやきっと氣付いていない。

「そう？　そうよね！　そうよね！　気が合うわね～！」

「母上、ネノが困ってる。少し落ち着いてください」

おうロイス！　ナイスだ！

「あらそうよね！　あ！　やだわ、わたくしつたら自コ紹介がまだだつたわね！」

ロイスさん、全然落ち着かれてないんですが。

「フローナ・サリス・ラニッシュよ。フローナと呼んでね！」

「あ、はい、いいえ」

ダメだパニックになつてきた。誰かこのお母様を止めて！　ついに手を離して！　手汗でベタベタなのになんて離さないのこの人！？

「フローナ……。いい加減じゅうじりに来い」

よしじがんばれサラリーマン王ー

「あらあらパパ！ なあに？ ヤキモチ？」

「いいから来い」

「分かったわ」

そう言つて立ち上がるお母様。……ん？ な・ん・で 手を繋いだまま？ 翼を広げてさそやかな抵抗を試みるが興奮状態のお母様には気付いてももらえなかつた。

「さあ行きましょうネノさん」

えええええ。

「可愛いジユノア。あなたもおいで」

ええええ！

「ネノさんはこっちらよ。ジユノアはこっちね」

言つ通りに座らされたが、何故かサラリーマン王の隣は私だつた。リーマン王・私・お母様・ジユノちゃん。私の前にロイス、その横にレイルという図である。

何故3・3で座らないんだとか、リーマン王に誘われたのはお母様なのになんで私が横なんだとか、そんなことは聞いちやいけない。いや聞けない。

「両手に華ね！ 嬉しいわあ！」

いやいやいや、華？まあいい、感覚は人それぞれ違うとしてお
いづ。

「とりあえず私は、右手にバラ、左手に雑草氣分だ。
バラはもちろんお母様。美しいがトゲというか余分なもんが付いてるからね。雑草はリーマン王。王に向かつて失礼つて？声に出さなければ失礼じやないよ！」

「わたくしネノさんにお聞きしたいことがたくさんあるのー。」

「ダ、ダウゾ」

「女性に聞くのは失礼なんだけど、好奇心には勝てないわ！ ネノさんはおこくつでこらつしゃるの？」

「じゅうはつや……じゅつせいトス」

危ない危ない。18歳じゃなかつた。

「まだ10歳なのね！ こうことはあと6年待てばいいのね！
楽しみだわあ」

何がでしようか？ なんか嫌な予感が……。

「6年後にはネノさんはわたくしの娘になるのよー。ふふ、誰のお嫁さんかしらねえ。ふふふふ」

怖い。怖いよママン！ なんかもう結婚が決定事項だよー。いいけどね！ 双子だったりー。

「随分ネノを気に入られたのですね」

レイルがいつもとはちょっと違う、少し妖しげな笑みで言つ。

「もちろんよ！ わたくし、ジユノアやネノさんみたいな可愛いものには目がないの！」

つむ、この人の感覚は一生分かりそうにない。

「ところで、ネノさんの翼は何故生えているのかしら？」

「ワカリマセン」

「そう。ネノさんは違う世界から来たんですって？」

「ハイ」

「お話を聞いてもいいかしら？」

「ハイ」

「ご家族は何人いらしたの？」

「父と母とバカな弟の三人デス」

「あらあら弟さんがいたのね？ ネノさんみたいに可愛かつたのかしら？」

小さい頃はよく似ていると言われたな。成長していくと私は失敗顔で千歳ちとせは成功顔とか言われたが。しかしどちらも中一病に変わりはない。

「そうですね、中一病ですが」

「あら大変！ [（]病気なの？ 大丈夫なのかしら？」

しまった。面倒くさいことになつた。

「うーんと……ダイジョウブです」

説明しようと思つたがやめた。
しかしお母様は逃がさない。

「どういった病気でござりしゃるの？　その、ツーバイツウといつのは？」

違います、中二病です。

「えつと……まあその、脳内でビームとか撃てたりしちゃこまや」

ダメだ。なんだこの説明は。でも本当なんだ！　千歳も私も中二病の邪氣眼系なんだ！！

あの頃はよく千歳と語り合つたもんだ。自分にはこんな能力があつてあんなことが出来てこなんんで……

「そして秘密の力が隠されてるんだあああああ！」

はつ！　久々に思い出して思わず叫んでしまった！

田の前には明らかに引いた田のロイスと、心なしか苦笑いのレイル。横のリーマン王は突然の叫びに驚いたのか、頬に付いていた手がズレていた。

しかしお母様は強かつた。流石ジユノちゃんの母親だった。

「まあ素敵！　ツー・バウトコツのは病気ではなく職業なのね！」

違います、色々違います。どうやつたら今の説明でそつなるんですか。でも面倒だからそれでいいです。

「ネノさんのお話は面白いわ！　もっと聞かせてちょうだい！」

と、言われたからレイルとロイスにした私の中二病設定を語つて

おいた。

最終的にやがて仲良くなつた気がする。レイルとロイスは廻っていましたが。

中一病にも色々ある（後書き）

今度連載予定のものを、試しに短編でひらしました！
よろしければ読んでみてください。

恋の前触れ！？（前編）

それはある日の町の光景

ジユノちゃんの部屋のソファに座つて話を待つていた時、ガチャリと扉が開き……

「おまえ誰だ」

扉を閉めたロイスからこの一言。地を這うような低い声。なんでロイスからそんなこと聞かれなきゃいけないんだ？

朝（と言つても毎朝）の日課となつた、ジユノちゃん家（部屋だけ）集会、をしに一番乗りで訪れたんだけど……

ロイス、記憶でもおかしくなつたんだらうか。

「何か言え。それとも何も言わば死ぬか？」

スッと空中に出てきた剣。

「わあ！」
「あ、？」

しまつた、緊迫した空氣だといつて、感嘆の声が漏れてしまつた。

だつていきなり剣が現れるんだよ！？ びっくりするじやん！
心の声に反応したのか翼がバツサリと広がる。

「お前……」

お？ 思い出した？ そのままバサバサと動かしてみる。

「ネノの親戚か？」

「は？」

萎えた。今ものつす”く翼が萎えた。

「誰か一早く来てー ロイスがおかしー でーす」

「俺の名前知つてんのか」

「ちょっと口イス本当に大丈夫？ 私だよ？ 音乃だよ？ 覚えてないの？」

「あ？ お前がネノなわけねえだろ」

「は？ ジャ誰が音乃さ！」

「誰が……つて、もっと小さくて可愛くてもうちよつと瘦せててからかい甲斐のあるのがネノだろ」

「うん？」
うん、落ち着こいつ。色々シッコむ所はあるだらうけど落ち着こいつ。
もつと小さい？ 一夜にして私成長したのか？

「うん？」

あれ、そういえば、視線が高いような……。

「でええ！－？」

ある可能性に気付いて自分の体をベタベタ触る。鏡で見たら早いんだけどね！

「む、胸が大きくなつてる！」

「いやそんなにデカくないけどな」

「黙れ！－」

「ウツソ！ ホントに成長した！？ なんで？ なんで！？」
しかもロイスが分からぬくらいの急成長？

「えつ、まさか…………戻つた…………？」

「何がだ？」

「いえなにも」

多分そうだ。でもこれはまずいかもしれない。

なんでってロイスが分からぬんじやきつとレイルも分からない。
犬になつた時は殺されなかつたし捕まえられなかつたけど今は人間
だ。

あつ、でも。

「ジユノちゃんならわかるかも…………」

「おい、お前何だ。ジユノアの女か？ アイツをそんな呼び方する
奴がまだいたとはな」

「だから音乃だつて！ 鈍感ロイス！－」

「死ぬか」

「いえすいません」

それからああだこうだと言い合ひをするがロイスは攻撃してくる
様子も、私を音乃だと信じる様子もない。

「はあ……話が進まねえ。いい加減吐け」

「だから音乃だつて」

「じゃあ仮にお前がネノだとして、何故突然可愛くなくなつた？」「ホンシ。テカくなつた？」

「……」

アイツちょっと殴つてきていいだろ？か。え？いいよね？ね？女の子に向かつて可愛くない？ひどくない？え？ひどいよね？

沸々と沸いてぐる怒りに震えてきたとき、ガチャリとドアが開いた。

「やあロイス。……と、ネノの親戚？」

流石双子。思考回路も似てるのか。

「違います。音乃です」「はは、まさか」

何その爽やかな笑顔でその笑い。

口には出さないだけで、やっぱリレインもロイスと同じこと思つたな。

あと今氣付いたが、私の翼を見て、兄弟や親と聞かないで親戚と聞いたのは血が近かつたらもつと可愛いと思つてゐるせいか。

自分達の顔が良いからつて世間なめてるよこの双子。

しかしながらいきなり戻つたんだらつか？

「うーん……」

怪しいものでも食べ…………あああー！
ロイスじゃん！

「やつぱりロイスのせいじちゃん……」

「あ?」

「昨日例の飴食べさせたでしょー。絶対それだ!」

やうだ。昨日寝る前に皆でジューちゃんの部屋について、夜食とか言つてロイスが色々持つてきた中にちやつかりアレが入つてたんだ。ちやつかりね。

ルンルンだつた私は、怪しい飴のことなんて忘れて食べた。その後自分の部屋に戻つてすぐに寝たから、寝てる間に飴の効力が働いたんだわつ。

「……あ。おおつ。……いや待て、とこいとは本当にネノか?」

「そうだよ!」

「ウソだろ?」

「どいらへんが!」

「そりゃあ……」

「やつぱり言わなくともいい! なんとなく分かつた!!」

「やつぱり言わなくともいい! なんとなく分かつた!!」

か絶対分かつた。自分でも自覚あるから言つな!」

どうせ可愛くないとか言つんだロイスは… レイルは微笑んでるだけだけどね! でもちょっとガツカリしてゐるような感じあるよ… ひしひじと云つてくるよ…

「まあ、とつあえず座りつ」

「つむ。」

「仮におまえがネノとして、寝てる間にデカくなつたとしよう」

「うん」

またか仮か。仮についてなんだ。まだ信じてないのか。

「自分の部屋からジュノアの部屋に来るまでに違和感はなかったのか？」

「うーん、寝ぼけてたし覚えてない」

それに前まではあの目線だつたわけで、寝起きなら尚更気にしながらつた。

実際、ロイスに指摘されるまで気付かなかつたわけだし。

「そうか」

「彼女がジュノアの部屋に来るまでに、兵士がいたはずだよね。彼らは何故止めなかつたのかな？」

それまで黙つて座つていたレイルが口を開く。

「それも問題だな。聞いてくるか」

スッと立ち上がり扉を開けるロイス。

「おい。聞きたいことがある」

「はっ」

「アイツがジュノアの部屋に入つて行くのを見たよな?」

私を指差すロイス。

「はい！」

「何故止めなかつた?」

「はっ。それはですね、ジュノア様から、白い翼を持つ者であれば

通せ」と仰せつかつていまして……

「なるほど。ああ、そうか。前に獸になつた時も翼だけは同じだつたからか。アレは珍しい翼だしな」

パタンと扉を閉めるとソファに戻つてくるロイス。

「……信じるしかないのか

「何その嫌そうな顔。失礼」

「これが俺の顔だ。失礼な」

「ふふ、いいコンビだよ。

呼んで来ようかと思つたけどもうすぐ帰つてくるだひつじ、こじで待とうか

ジユノちゃんのことだひつ。あとゴザ。毎食を食べるため訓練から一旦戻つてくるのだ。

ジユノちゃんならきっとわかってくれるだひつ。でもジユノちゃんも落胆した顔をするのだろうか。ちょっと心配だ。

言つた方がいいのかな？ ホントは18歳のじょしーセーです！つて。うーん、悩み所だ。

恋の前触れ！？（前編）（後書き）

え？ 服はどうなつたって？ そりゃ服も大きくなる仕様です！（

（キリッ

ご都合主義です！（キリリッ）

恋の前触れー?（中編）

「……………」

ジユノちゃんが私を見つめて数分。その後、口を開いた。

「ああ、ネノか」

「うん、 そ うなんだけど。
数分間見つめてそれか。 それだけか。 いや、 わかつてくれて嬉し
いけども。 流石ジユノちゃんだけども。 それだけか。」

「ジユノちゃん、 それだけ……？」

すると一瞬。

「……大きくなつたな」

「うん、 そ うなんだけど。
どこの近所のオッサンだよ。」

「なんだジユノア、『イツヤツボリネノなのか?』

「だからそういう言つてゐるじゃん!..」

「面影がある」

「どうらくんにだ?」

「全体的に。…………可愛らしさが残つてゐる」

「くはっ」「ふつ

思わずジユノちゃんを見たが、その後に聞こえた音に振り返ると、冷静なレイルがコーヒーを吹き出して若干焦つているように見える。ロイスは笑いを堪えてるが抑え切れていない。ゴザだつて俯いて耐えてるようだが肩は震えている。
どいつもこいつも失礼な奴らだ。

「おまつ……ふはつ。……いや失礼、お前からそんな言葉が聞けるとは思わなかつた」

「俺達の教えの賜物かな」

いつもの笑顔に戻つたレイルが平然と言つ。
ナニを教えているんだ。

「で、これもあの飴の効力としたら数日で戻るわけか
いやあ、どうなんだろう……」

もしかしたら、飴関係なしに単に戻つただけじゃないかとも思つのだ。

「思い当たる節が他にあるのか?」

「ど、どうしよう。言つへ、言つひやう!..?

「何か隠してんのか」

少し低くなるローヴースの声。ちよっと・わ・い なんつって。
かっこいやー、まつむちやーー！」

「えつと…………ホントは元の世界では一歳でっす ハヘッ
「可愛くねえ」

ボソッヒロイスが呟いた。ぱちり聞こえてるよかーの君。

「で？ 本当なのか？」

「そーだよ！ 何か知らないけどトコッフしたら小さくなつて翼生
えてたんだよ！」

「くえ」

「興味なしー？」

「いや？ ビーーで幼い割に時々言動が変態じみてると思った」

「否定は出来ない」

皿巻じやないが皿覚はあるー。

それからジユノちゃんに黙っていたことを謝つておいた。

「……別にいい」

つていうジユノちゃんらしい答えた。
レイルはいつも笑みのままだった。

一田騒動（？）が落ち着くとジゴハサヤんとゴザは訓練に向かつた。

リニーはもう少ししたら来るらしい。

あ、そうこえば、リニーとゴザのいる……

「ねえねえ、リニーって、なんかよくゴザを田で追つてない？」

「あ？」

「だからあ、もしかして……コニーってゴザの事好きなのかな！？」

「今更それを言うのか？」

「ふふ、前からだよ」

二人はそう切り返してきた。
え、気付いてたの？

「お前二ブイな。恋愛したことないのか？」

「あるよー」

失礼な！

「漆黒のクラウディ様とか、霸王エルメディス様とか、皇帝ルディゼル様に、微笑みの貴公子ロイド様、腹黒王子ヴァンス様、それに……」

「あああ、もういいもういい。それで？ 叶った恋は？」

「もちろん全部だよー！」

「……は？ お前の世界は皇帝やいら霸王やいら王妃たりと気軽に恋愛するのか？」

「中々自由な世界だね」

「うん？ ああ、違うよー。これは……言いたくないけど、次元に生きてる人達との恋だよー」

「一次元……」

「そう！ ゲームの中に存在してゐるの…… 皆イケメン過ぎて、考
えるのも辛くて眠れない夜が続くよ！」

「つまり…… 現実に存在しないのか？」

「だあかあらあ！ 一次元に存在するの……！」

「…… そうか」

すうい可哀想な子を見る田でロイスとレイルが見てくる。なんだ
らうの感じ。なんかものすう悔しいぞ。

「で、結局ネノは現実で恋愛したことないんだな？」

「ううつ。だつて、だつてしまつがないじゃん！！！ 皆カツ 「良過
ぎるんだもん！！」

色んな苦難の壁は乗り越えられても、一次元の壁だけはどうがん
ばつても乗り越えられないんだもん！！！」

ぐう、心に響くぜ。

「苦難の壁は乗り越えてきたのか？」

「ていうか、うん、まあ。越えられない壁は横から抜けてくるか、
穴開けてぐぐり抜けて来た感じかな。……でも、でもね！」

「あ、ああ」

「一次元の壁だけは、穴開けたら画面壊れるだけだし、横からすり
抜けても見えるのは背面だけだし、画面の中に入ろうとしても一枚
の薄く…… でも何よりも厚い液晶に阻まれるし……」

「お、おつ……」

「一次元だけは、越えられないの……」

「そうち…… いや、その、悪かつた」

バツの悪そとに頭を搔くロイス。どうやら熱意は伝わったらしい。

そこへレイルが歩いてきて私の正面で止まる。
そしてゆっくりと引き寄せられて……って、

「うええ！？」

「ふふ。ねえネノ？」

「ははははいナンデショウ」

小さい時は抱っこされたって頭撫でられたってなんとも思わなかつたが、今は異常に鼓動が早い。やつぱりリアルイケメンは違う。

「俺よりそのゲームの人達のがカッコイイかい？」

「ええっと、えっと、ドウナンデショウ」

さりげなく、さりげなく手が腰に回ってきて更に密着し、もう心臓がバツクバクだ。

「叶わない恋に涙を流すなら、叶う恋に喜びの涙を流してみない？」「ははははははいっ。…………でえ！…？」

「え？ ちょ、え？ え？ なにこれ。何フラグ？ え？ は？ ええ？
コレ、これ告白う！」

「なんだレイル。趣向変わったのか」

パニクリ過ぎて、ロイスのそんな言葉は聞こえていない。

「うん？ ふふ、可愛いじゃない。ロイスだつてちょっと思つてる
でしょ？ 双子だもんね」

「ふんつ。珍しいから面白がつてるだけだ」

「そう？」

「とりあえず今はその辺にしどいた方がいいんじゃねえか？ 爆発しそうな程赤いぞ」

「やうだね」

ショート寸前のネノを解放すると、離れ際に髪にキスをした。

「レレレレイルフ」

「なあにネノ？」

甘い。笑みがものつそ甘ハツー ナニコレー？ 恋人仕様！？ そりゃ世の中の女全員落ちるよー！

「チツ」

レイルの笑みに見惚れないと真後ろで舌打ちが聞こえ振り返ると……

「……タコみたいだな」

雰囲気ぶち壊しだよー！ なんだ!? なんなんだ！ 敵か！ イツは敵なのか！！

恋の前触れ！？（中編）（後書き）

あれなんか恋愛模様？

ええーと、ゲームの名前てあんな感じでよかったです？
違つたら苦情くだらん

恋の前触れ！？（後編）

「ていうかリーネでジユノちゃんが好きなんじゃなかつたの？」

「ああ？ あいつは前からユザが好きだぞ」

「前から？」

ロイスと向き合つて話していると、後ろから髪を触られる。誰かは予想が付いて田だけ動かす。

「俺達が城を抜け出してジユノアの別荘へ行くとユザも来るんだよ。その時に好きになつたんだろうね。きっとジユノアに向けるのは憧れの視線だよ」

「ユザは鈍感だからな。気付いてないが」

「ジユノちゃんは知ってるの？」

「薄々気付いてるんじゃない？」

人の恋愛に気付くんだろうか。

「ジユノちゃんがリーネを好きつて可能性は？」

なんかそんな気がする。リーネを連れて来たのもそのためだったりして。

ああジユノちゃん。敵わない恋をしてるんだね。

「セーな。ジユノアの恋愛なんて珍し過ぎて判断しつらい。娘と思つてる可能性だって捨てられない」

「いやそれはないでしょ」

自分とそんなに歳離れてないじゃん。顔だけだつたらリニー童顔だから20歳差ぐらいありそuddo。胸はあるけどね。胸は。私? 聞かないで。

「おまえは今日まだうするんだ?」

「これからリニーを驚かしに行こうかと」

「てことはガキの守りはしなくていいんだな」

「ガキじゃないよー」

「ああそうかい。じやーな」

ヒラヒラと手を振りながらロイスは出て行く。きっとまた女の所に行くんだろう。

「俺も今日は用事があるんだ。またね」

「うん」

頭を軽く撫でた後に出でて行くレイル。レイルとロイスが用事つて言つても女しか思い浮かばないんだけど。

でもレイル私に、じつ、告白したよね? ね??

「わかんない……」

まあいいや! ととりあえず、リニーの元へ行いつ。で、リニーを

弄るつ!

「はあいっ！——！」

「えつ！？」

ノックもそこそこに部屋へ押し入ると、ベッドを上回領する。ん~、
音乃ちやんつたら大・胆

「え、えつと……」

「私分かる？」

「あの、その、違つてたらすいません……ネノ様、ですか……？」

「さつすがり——！」

ベッドから飛び降りてリニーに抱き着く。リニーより背の低い私は、一度リニーの胸に飛び込む形だ。うん、やっぱいい胸してるよ君。

「ど、どうされたんですか？」

「あのね、ホントはこっちが本当の姿なの。トリップする前はこの姿で18歳。でもトリップしたら小さくなつて……。ま、そういう感じ……」

「あのつ、でも、あつじやあ私つ

「お落ち着いてリー——！」

まさかこんなにパ一ぐるとは思わなかつた。

「だつて人形遊びとか……ごめんなさいっ」

「いいよいよ。新鮮だつたから。あの状況じや仕方ないし

「あのも、他にも無礼を…」

「いやいやいやもういいよヨー。無礼とか知らないから。それより…！」

「はい…」

こきなり大声を出した私にびっくりして返事を返すヨー。

「ヨーーってや、ゴザが好きなの？」

「え、えええー…？」

興味津々で聞くと見る見る顔が赤くなるヨー。いやさつ可愛い

！

「ちよっとヨーー座つて… 今日はまだトークしよう…！」

うん、決定！ 根堀葉堀やわらげやつべだよ…！

「んつとね～、まずは～好きになつたのはいつ？」

「…はい。私、ジユノア様のお屋敷で働かせていただき始めたのは一年前なんです。慣れない私にジユノア様も他の方も優しくしてくださいたんですが、ある日ジユノア様が留守中にゴザールド様が尋ねて来られて…」

「ふんふん」

「…一田惚れ、でした」

「ほーほー」

まあ、顔はいいからね。レイルとロイスにはあるけど。

「それからはずっとお慕いしています」

「ふむふむ」

「なので毎日姿を拝見出来る今の状況はすばらしいです。ジュノア様にもネノ様にも感謝しきれません」

「へっ？」

「ネノ様が来られなければ、王宮へ来ることは出来なかつたですから」

「ああそつか。 そんで？ 告白は…？」

「いえつそんな！ そんな……」とは出来ません。迷惑でしょうし「迷惑！？ 私のリニーに好かれてるつてこうのにコザの分際でそんなわけないよ！ 自信持つて！ リニー可愛いんだから！ 胸もあるし…！」

「む、胸ですか？」

「うん、すごく羨ましい。私なんかAだよ？ 今の日本の若者は段々豊かになつてるので、ゆとり教育にも負けずにAだよ…。リニーは…Eぐらいかな」

「二ホン……ネノ様のお国ですか？」

「そう。色々問題はあるけど、いい所だよ。つてそれはいいとして。リニーは一年も片思いしてゐることだよね？ 前に彼氏がいたのはいつなの？」

「かつ彼氏だなんて…」

恥ずかしそうに俯くリニー。

「え？ 作ったことないの？」

「はい……」

「うつそ！ その可愛さで！？ 私なら放つとかないよ！ コザなんか勿体ないけど、私一応女だしな～。禁断の世界に足踏み入れるのも悪くないけどリニーが応えてくれなきゃうだしな～」

首を傾げるリニーは私の言つた意味がわからないらしい。いいね、新鮮だよ。ピュア！

「あ～リーホント可愛い。食べりゃいたい」

心の声が漏れれば

「え！ 私美味しくありませんよ？」

真面目な答えが返ってきた。ていうかシシコむ所はそこなのか。
まあそんなリーハーも可愛い。そうだ、質問はまだあるんだ。

「ねえねえゴザのビニがいいの？」

「え、あの……」

「顔？ 性格？ テクニック？」

「テクニック……？」

「ああいいの、何でもない」

「ゴザールド様と初めてお会いした時、驚いて手に持っていたお皿
を落してしまったんです」

その時のことを思い出しているのか、リーハーの顔が嬉しそうに綻
ぶ。

「それで割れたお皿の破片が私の足を掠つて……それを見たゴザ
ルド様が慌てて止血して、魔法で治してくださって……」

「へえ」

「危ないからって、割れたお皿の片づけまでしてくださって……本
当は私がしなくちゃいけないんですけど、『大人しくして。これ
命令だから』って笑つておっしゃって……」

「ちょっとカツコイイね」

「もうゴザールド様しか見えないです」

「やだあリーハーったらかわいい！ ……ゴザになんて勿体ない

！」

「そそそそんなつ！ 本当は諦めなければいけないんですが、どうしても難しくて……」

「なんで？ 諦める必要なんてないじゃん？ 王子であるレイルもロイスも好き放題女遊びしてるんだから、その下のゴザだって……あ、でもリーナで遊んだらコロス！」

「きっと私なんてゴザールド様の目には、映つてないです」「そんなことないよ！ いい？ リーナー！」

それから長い長い私的恋愛講座が始まった。

・・・

「ロイス、ゲームをしようか」

「あ？」

夜、オレ・レイル・ジュノア・ゴザの四人だけがいる中、突然静かに切り出したレイル。今のレイルは、悪魔の微笑みを浮かべている。

「ネノを、どちらが先に落とせるか。それがゲームの内容」

ほらな、あの笑みは危ないんだ。

「……いいぜ」

だがその裏の思考も俺には分かる。

「ちょっと待つてください！ いくらなんでもネノ様はダメでしょ
う！」

抗議するゴザ。邪魔をするなど言わんばかりに、レイルの冷たい
瞳がゴザを捕らえる。

「ゴザ。おまえは人の心配より自分の恋の心配したら？ あんまり
ノンビリやつてるヒリーネも対象にするよ？」
「なつ」

赤面するゴザ。どうもレイルの心に火を付けたらしい。

「気付いてないとでも？ ジュノアさえも気付いて、気利かせてリ
ニーをこっちに連れて来たのに？ 近くで獲物がチラついてるとつ
いつい手を出したくなるんだ」

「それは！」

「リニー可愛いんだから気を付けないと。ねえロイス？」

「ああ。胸あるしな」

「俺はもう少し小さくてもいいかな」

「まあ、最終的に大事なのは感度だが」

「ふふ」

「ちょっ」

「だからさ、早く落しなよ。じゃないと奪うよ？」

それは誰に向けられた言葉か。
動搖しているゴザと田を瞑つたままのジュノア。
さあ、これからが楽しみだ。

恋の前触れー? (後編) (後書き)

いやあお待たせしました。待つてないとか悲しこじと言わなこでください
スランプなんでしょうかね? 小説とも書く気が中々起きないで
す。

全部微妙に進んで止まっています。んま、その内詰るだしうーーー。
読んでいただきありがとうございました!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8431p/>

トリップしたら幼児化＆翼が生えた！

2011年8月28日21時54分発行